

第2回徳山駅周辺まちづくりシンポジウム

日 時 平成22年1月26日(火) 13:30~16:30

場 所 周南総合庁舎2階「さくらホール」(周南市毛利町2-38)

開催内容 ○基調講演

・テーマ「生活貧乏からの脱出—まちに居場所を創る」

講師：篠原 修(政策大学院大学教授 徳山駅周辺デザイン会議会長)

○「徳山駅周辺整備基本計画及び今後のスケジュールについて」

周南市中心市街地整備課

○パネルディスカッション

・テーマ「 後世に何を残すか 」

パネリスト：内藤 廣(東京大学大学院教授・徳山駅周辺デザイン会議副会長)

羽藤 英二(東京大学大学院准教授・徳山駅周辺デザイン会議委員)

藤井 英雄(徳山商工会議所会頭・徳山駅周辺デザイン会議委員)

村越千幸子((社)山口県建築士会・徳山駅周辺デザイン会議委員)

筒井 祐治(国土交通省 中国地方整備局 建政部 都市調整官)

コーディネーター：篠原 修

●司会

大変長らくお待たせいたしました。本日はお集まり頂まして、誠にありがとうございます。

それでは只今から「第2回徳山駅周辺まちづくりシンポジウム」を開催させていただきます。私は本日の司会進行を務めさせていただきます荒石由紀恵と申します。どうぞよろしく願いいたします。

現在、周南市では「徳山駅を中心とした、歩いて暮らせる集約型の交流まちづくり」を目標に、実現化に向けて事業が動きだしたところでございます。

本日のシンポジウムでは、周南市の玄関口となる駅周辺の魅力を高めるための景観デザインやまちづくりについて、一緒に考えてみたいと思います。

この後、午後4時30分までのおよそ3時間という時間ではありますが、皆様にまちづくりについて何か感じ取っていただけたらと思います。

それでは、最初に主催者を代表いたしまして、周南市長 島津幸男が一言ご挨拶させていただきます。

●島津周南市長

皆さん、こんにちは。

先ほど、先生方とお話しをしていたら、羽藤先生は児玉源太郎と姻戚関係にある、篠原先生もそうだといいことでびっくりいたしました。やっぱりなんとなくですね。一生懸命されるのは何かと思ったら DNA なんです。こうゆう方々が、この街の色々なことを考えて下さっています。

実は来年 NHK で「坂の上の雲」の児玉源太郎が活躍する場面が放送される。10 月、11 月、国体があった後ですね。日本中が児玉源太郎に注目する。それから国体があって、おそらく日本中がこの街に注目する。

次の国際会議をやりたいと思っています。そのあと2年の内には、きらら博、ジャンボリーの大会があって、そのまた2年後にはジャンボリーの国際大会があります。この周南も3分の2ぐらい引き受けるんです。

そうゆう時にですね、周南の玄関口がシンボルとして、エコタウン、高齢者に優しいバリアフリーのまちづくりがしっかり出来ているということですね、皆さんで考えて頂きたいと思います。

今日はですね、沢山集まって頂いておりますけれど、皆さんの熱い想いと、やはり、私は計画というのは決めたら絶対ではないと思いますが、この時点でベストのものを提案して頂き、ある程度のスピード感を持って作り上げないといけないと思っています。

多様なご意見がでるかと思いますが、心から楽しみにしておりますし、これからもどうぞよろしくお願ひ申し上げます。ご一緒に良いまちづくりをしましょう。

先生方、どうぞよろしくお願ひいたします。以上です。

◆司会

ありがとうございました。それでは、篠原先生、お席の方にお進み下さいませ。

それでは、基調講演に移らせて頂きます。「生活貧乏からの脱出—まちに居場所をつくる—」と題しまして、政策研究大学院大学教授の篠原修先生にお話して頂きます。

篠原先生は現在、徳山駅周辺デザイン会議の会長として、徳山駅周辺整備計画策定にご尽力頂いております。本日は専門家としてのお立場から様々なお話が伺えると思います。

それでは、篠原先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

◆篠原政策研究大学院大学教授

紹介頂きました篠原です。先ほど市長さんはちょっと間違っただけをおっしゃったので、訂正しておきます。私の学生時代の恩師はもう亡くなりましたけれど、八十島義之助先生と言います。八十島先生は江戸時代の宇和島藩の家老の血筋で、お爺さんが渋沢栄一の番頭でした。まあ、幼稚園は慶応、小学校は学習院と誠に品の良い、育ちの良い、温厚な方でした。

それで、児玉源太郎ですが、奥さんが児玉源太郎の孫でした。今は体を悪くされて車椅子を使っています。実に品の良い女性でした。だからどうって訳じゃないけれど、多少は縁があるかなと思っています。

児玉源太郎がここ（周南市）に縁があるとはつい最近知りました。市役所の人にはなかなか教えてくれな

いのです。もう一言、ふた言申しますと、児玉源太郎は日清戦争に日本が勝った時に台湾にいたものから、第三代の台湾総督府の監督でした。軍人ですから、都市計画をやる人間として後藤新平を引っ張ってきました。後藤新平というのは、今の民主党の幹事長の出身地一関ですけども、そこで医者の学校を出てから内務省に行って、そこで児玉源太郎に引っ張られて台湾に行って、そこで都市計画をやって、下水道の整備などをやった功績があるのです。まあ、児玉源太郎も本当に偉い人です。

それで「児玉源太郎の出身地は徳山なんですよ」と教えてもらってびっくりしました。まあ、長州だっというのを知っていたのですけれども。まあ、訂正はそのぐらいにいたしまして、今日はちょっと変な題で話すことにいたしました。

私は学生時代から景観、風景のことをやっています、それが1967年からですから40年以上になります。どんなことをやっていたのかと言うと、今日は講義ではないので、そんなに詳しくは話ませんが、我々が何を見ているのかと。見えているものは何で、何が見えてないのかと。あるいは皆さんがわかり易い言葉で言うと、まあ、風景を見ますよね。なんだか知らないけれど「これを美しい風景だ」とか「あんまり美しくない」とか思うわけです。まあ、対象に罪はないのですが。あるいは、夕日を沈むときに感動したり、しなかったりする。美醜を判断しているわけです。どうゆう風景の時に感動して、どうゆう風景の時に感動しないのか。まあ、役に立たないっていうか、すぐに何かの役に立たない研究をしてきました。

昭和の最後の頃、40代だったのでちょっと遅かったのですが、縁がありまして、橋のデザインをやらないうということになりまして、面白そうだからやってみました。続いて、川をやったり、世の中評判の悪いダムをやったりしました。特に最近、後で前に出てこられる内藤さんとか羽藤さんとか小野寺さんと一緒にやっている駅とかがあります。どうゆう考えでやってきたのかと言いますと、やっぱり橋をかけるなら綺麗な方がよいよねと。渡っていて楽しい橋が良いよねと考えるわけです。あるいは川だったら、水辺を散歩するというのは実に気分がスッキリする、そういう水辺を作るにはどうしたら良いのか。あるいは駅で言いますと、今、列車を使う人は少なくなりましたけれど、やっぱり外国に行って、良い駅、ホームに立つとワクワクしてくる。そういう意味でいうと日本はひどいのです。ブルートレインは無くなりましたけれど、上野から北海道に行く「北斗星」という列車があります。なかなかデラックスな車両です。それがですね、上野のホームから出る訳ですけど、今でも変わらないと思うのですけれども13番線からでるんです。上野の駅というのは、上野の公園側に後で増やしたものですから、13番線というのは一番低いところにあるんです。そうすると、上の屋根がですね、コンクリートの蓋が被さっていて、暗いんですよ。あんなに良い列車に乗って楽しもうというのに、暗いんです。それで、東北地方を抜け、青函トンネルを抜け、函館を過ぎると、運が良くて天気が良いと駒ヶ岳、非常に綺麗な山が見えて、大沼公園が見えてくる。さあ、それで札幌駅かなと。まあ、札幌駅には何度も行っているんですが、今、札幌駅、札幌の街はどんな感じになっているのかな、と期待に胸を踊らせて列車を降りてみると、かつての駅とは違って、またホームの上にコンクリートが被さっていて暗いのです。これじゃあ、列車ファンは離れるよね。デザインは綺麗な橋を作りたい、とか、心なごむ川にしたいとか、なにか列車に乗る前からワクワクする駅を作りたいとか、そんなことを考えながらやってきました。それから、もう一つ付け加えると、後半のパネルディスカッションのテーマにもなりますけれども、それをいま生きている人たちだけでなく、皆さ

んのお子さんとか孫に残して、ずっと愛着を持って使ってもらえるものを作りたい、そう思って20年ぐらい仕事をしています。そうしたところが、あそこに座っているデザイナー仲間、南雲勝志さんという人がいて「先生、窓山に行きましょう」と言うんです。「窓山」って窓の山って聞いたことがないんです。窓山ってというのは、秋田県でだいたい北の方です。秋田の北に能代というところがあって、スポーツ好きの人なら知っているかもしれません。バスケットで有名な能代工業というところがあって、その能代から川を遡っていくと二ツ井というまちがあって、そこは秋田杉の集散地で栄えたところで、その二ツ井から車で30分ぐらい登っていくんです。そうすると白神山地って世界遺産のところがあります。そこを行くと「なるほど窓山か」と思うのわかるのです。向こうの方に白神山地が見えて、前は谷で開けていて、そこだけ台地状になっていて、空を見ると、空に開いた窓みたいになっている所です。誠に不便なんです。5軒家があったそうなんですけれど、僕が行った時にはもう1軒しかないんです。つまり、廃村ですね。「行くのは良いけれど、そこに行って何するの?」と聞いたら、「篠原先生、篠原先生、デザインで街を救いましょう」と言うのです。人を救うのはお医者さんの専門で、あるいは行政の責任で、あるいは隣近所の集落の責任で、都市でさえ衰退している所を救えないのに、デザインで人を救える訳がないでしょう、と思ったんですけれど、まあ行きました。杉を使ったイベントをやったんで、東京からも秋田からも人が来て、すぐ近くの二ツ井の人に聞いたら、「若い女性がこんなに窓山に来たのは何十年ぶりではないか」ということでした。帰ってきて都市計画という雑誌に「何か書け」と言われたので、ちょっと書きました。デザインで人が救えるんだったら、そんな楽なことはないと思います。行政ですらなかなか人を救えないのにデザインで救える訳がない、と書いたんですけれども、それ以来ちょっと頭に引っかかってまして。歩いて楽しい散歩道をつくるとか綺麗な橋をつくるとか、やってきた訳ですけど、一体全体、本当にデザインするということではできないのかな?とと思っていましたけれども、そこは本当に引っかかっています。その後、困っている人はどうゆう事に困っているのかと勉強をしました。今日、参考文献にあげましたけれど、湯浅という人がいて、最近有名になっているのでテレビでご覧になっている方もいらっしゃると思いますけれど、年末に年越し村をつくったりして、困っている人を救おうとしている人です。経歴は東大の博士課程まで行っている人なんですけれど、困っている人に尽くしているんです。その人の本を読むとですね、「貧困」というのは、簡単に言うと「貧乏」というのですけれど、グラフで横軸に所得階層人口を並べる。年収50万以下の人、50万から60万、60万から70万、70万から80万という具合です。そして、縦軸にその人数を棒グラフで表す。すると中位数って、平均ではないんですけれど、丁度真ん中ぐらいの人の年数ってどのぐらいかという事ですね、大体400万円ぐらいなんだそうです。独り者であろうが、奥さんがいようが、子供がいようがですね。その中位数っていう人の半分、その半分以下の人が貧困層という定義だそうです。そうすると、どの位かという事と大体200万円ぐらいなんです。これは、日本の政府はずっと発表していなかったんですよ、恥だから。湯浅さんの本を読むと、皆さんが思っている通り急激に格差が広がっていて、人口の15%ぐらいが貧困層です。困っている人というのは深刻ですよ。高校卒業しても3割以上が就職できない。どうするかという事、一時期「フリーター」という言葉が流行りましたが、あれは職業に縛られたくないからやめてやろうという人なのかと思ってみたら、調べてみたら違うんです。例えば、就職できなくて、バイトで働くどしますね。そうすると、今、時給はどのぐら

いなんでしょうか。たぶん1000円も貰えないでしょう。この辺りだと800円ぐらいでしょうか。仮に800円とすると、一日働いて6000円ぐらい、30日は働けないですから、20日間働いても12万円ですか。で、下宿代も払わないといけないし、飯だって食わなければならない。大変な人が沢山います。湯浅さんに言わすと、そういう人に就職を斡旋して話すらしいんです。そうすると、そこ（配布資料）にも書きましたけれど、困っている人は、お金に困っているだけではないんです。もちろんお金に困っているんですけど、お金だけでなく人間関係も貧乏らしいんです。つまり一緒に楽しくお酒を飲んでストレスを発散するとか、あるいはどこかに一緒に旅行をしたり、困った時に相談できる人がいるかということです。そういう人がいないんです。それは本当困るらしいんです。下宿やアパートを借りようとしても保証人になってくれる人がいない。そういうことなんだそうです。それから、今は人間関係のお話でしたが、居る場所がないということだそうです。ホームレスという言葉はずいぶん昔からありました。東大に努めて居る頃から、1年に1回は学生を連れて都内を廻っていました。人を見るためではなくて、日本橋ってというのはいつ頃できて誰が設計したんですよ、とか、日本銀行ってのはいつ頃できて、日比谷公園ってのは誰が設計していつ頃できたという、歴史的なものを一日で見て回るんですけど、最後に船に乗って浅草まで行くと、ブルーシートが沢山ありました。湯浅さんに言わせると、ホームレスは本当に家がない。しかし、最近、ホームレスに対して冷たいですからね。新宿も一時期いましたが、全部追い出しました。で、下宿を借りられる人が入れば良い、アパートでも借りられる人がそれもない人はどうしているかという、他の研究室の学生に聞くと、どうも、ネットカフェにいるらしい。僕は行ったことがないんですけど、研究している学生に、「ネットカフェってどのぐらいお金がかかるの」と聞くと、1時間300円だそうです。で、インターネットをすることもあるんですけど、寝る場所がないので、一日1000円ぐらいを払って、ネットカフェで寝ているらしいんですよ。ホームレスの人とか、ネットカフェの人とか。下宿とかアパートが有ったにしてもです。

昔、大学を留年した時に草津温泉にアルバイトに行っていて、旅館の従業員がどんなところに住んでいるのかアンケートを取りに行ったことがありました。草津とか雪が深いところもあるんですが、やはり行ってびっくりしましたね。三畳一間ぐらいのところでも全然日が当たらないところに居るんですよ。で、湯浅さんに言わせると、貧乏っていうか、貧困っていうのは3つがセットになっている。お金と友達というか人間関係と居場所。で、湯浅さんに言わせるとそうになってしまうと「溜め」が無いというんです。つまり、なんでそんな条件のところに住んでいるんだ、なんでそんなところで働いているんだ。もう少し良く考えて安定した職場に就職した方が良い、あるいは、賃金の高いところに行った方が良い。でも、それをするには1ヶ月から3ヶ月ぐらい余裕がないと出来ないんですよ。だけど、次の日の食うことに困っているから、そういう余裕がないんです。目の前の仕事に飛びつかざるを得ない。そういうことを称して、彼は「溜めがない。」と言うんですよ。時間的にも。そんなことをこの1年ぐらい読んでいます。ちょっと暗いですね。でも、現実なんです。しばらくして「ああ、そうか」と思いましたけれど、考えてみると、貧困な人っていうか、貧乏な人っていうけれど、我々自身はどうだろうかと思ったんですよ。確かに、明日明後日のお金には困っていないけれども良い人間関係を持っているのでしょうか。皆さんもそうだと思います、働いている方はそうだと思いますけれど、自宅、働いている方だったら職場、しかし、自宅と職場

以外に自分がほっとできる場所を持っていますか、あるいはそこに行くとなんとか会えて元気になれる場所を持っていますか。貧乏の話は暗いんで、自分自身に戻して考えているんですけど、皆さんにも考えて欲しいんです。どうですか。自宅、職場。しかし、職場も机が狭い、その上には書類がいっぱい積んであって、右を見りゃ人がいて、そこしか居場所がない。私はタバコを吸うのですが、ひどいんです。ある役所では屋上の吹きさらしに喫煙所が設けられている。タバコを吸う人間に対して居場所は提供していないんですよ、犯罪者扱いです。そう考えてみると、職場っていうのは稼ぐだけの場所です。居場所っていうのがあるのかどうか。それから、家に帰ると、考えてみると皆さん居場所はありますか。お金持ちの人は良いんです、家が広いから。書斎もあるでしょう、応接間もあるでしょう。天気良ければ庭に出て歩くこともできるでしょう。しかし、もしかしたら寝るスペースしかないんじゃないですか。この間、内藤さんと話していて「考えてみたら、そうだよ。自宅って言うても、落ち着ける場所は、トイレだけかな」という話になりました。亭主の現実かもしれません。あとは子供と奥さんが全部占拠している。だから、自宅、職場しかないんです。街なかに、これは僕がほっとできる場所だな、知り合いと会って、ワイワイできる場所を幾つか持たないと実に寂しい。それが一番欠けているんじゃないか、日本の都市。私事で申し訳ないんですけど、一時期、娘がスペインに行っていたので、女房と行きました。まだ、夕食まで時間があるのでどうするかということで、バルって言うんですけど、一杯飲み屋に行ってみました。ビールが出てきて、この店は魚がうまいと言って、魚のフライが出てくる。ダラダラと長く居る人は居ないんですよ。今日は魚が食べたいと思ったら、行きつけの魚がうまいバルに行く。肉が良いと思ったら違う店に行くんです。色々行きつけの店があるんです。なんて言うんですかね、そうゆう居場所っていうのを余りにも考えてこなかったんじゃないかと思っています。駅と駅ビルと駅前広場とちょっとした小さい広場ができるんですけど、そこを「皆さんだったら、どういう居場所にしたいんですか」ということなんです。徳山の良いところは、今もそう使っていますよね。駅ビルに行くとなんとか中学生とか高校生とかがテーブルを囲んで勉強して居たりする。あれが居場所です。駅のところであんなスペースを持っているところは無いんですよ。なんで、一体全体、物質的に豊かになっているのに、こんなことになっているのか。と考えると、それは文明ですよ。文明の結果こうなったんです。つまり、人間というのは、楽をしたいんです。歩くのは面倒なので人力車に乗りましょう、バスに乗りましょう。やっぱり車は便利だよ、雨が降っていても雪が降っていても行きたい時に行きたいところに行けるし。それから、電話だって便利ですよ。僕の尊敬している夏目漱石っていう人は、明治にかけて青春時代を送っていますが、その頃のことを知るとびっくりしますよね。考えてみたら電話がないので当たり前なんです、友達に会いに行く時は何の予告もなく行くんです。で、居なければ帰ってくる。今でしたら不便ですよ。今だったら、電話をしておいてガッカリすることもない。それから、テレビがあれば何でも情報は入ってくる。楽をしたいんですよ。主婦の人では一番楽をできるようになったのは洗濯機でしょう。覚えていますか、洗濯機がない時はゴシゴシ洗ってましたよね。あれは大変だったと思います。だけど、もっと便利になっていったが故に、車に乗るから、人とすれ違うこともない。知人が車で来てるなと思ってもお互い車を止めて話すこともない。車のお陰でどンドン人間との関係が疎遠になっていくという結果です。人間関係が希薄になっていく。居場所は昔はどこでもあったんですよ。僕の時代はテレビなんてなかったですから、テレビを持っている

家に皆集まってジャイアンツの野球とか見ていた。当時、昭和 20 年代、30 年代は街なかには賑やかでしたよね。みんなで一緒にテレビを見ていた。だけど、今便利になって、家にテレビがあって、今はどうなっているかという、地方に仕事でいくと、夕方になるとポツンポツンと電気がついていて、大体分かります。独りでテレビを見ているんです。便利だけど、寂しい。だけど、これは、真剣に考えたことがあるんですけど、押し留められないですよ。テレビが嫌いだからって持っていない人は居ますけれど、洗濯機をやめて洗濯板で洗濯するっていう人はいないでしょう。車を手放す人も居ないですよ。押し留められないです。楽をしたい、快適に暮らしたいという思いは。昔、電車にエアコンなんて付いていませんでしたが、あれはエネルギー消費量はすごいですよね。押しとどめようがないんですけど、放っておくと、どんどん湯浅さんがいうような、金銭はともかく、二つ目、三つ目、つまり、人間関係、居る場所、心のゆとり、時間、失っていくと思うんです。これは誰かがどこかで反撃しないとまずいです。ご承知だと思いますけれど、交通事故死はどんどん減ってきているんです。僕が学生時代だった昭和 40 年代は毎年 1 万人ぐらい死んでいました。今はどのぐらいかという、年間 5,000 人ぐらいです。交通事故死はどんどん減ってきているんです。しかし、この 10 年全く減らないのは自殺です。また暗い話になってきましたが。年間 3 万人以上自殺していて、それが 10 年以上も続いているというのは、文明先進国では無いですよ。これは、もう生活が貧乏になっている。もちろん、お金に困って、それが原因の人も居ると思いますけれど、困った時に相談にのってもらえる人がいない、共に語れる人が居ない。どこかの場所に癒されて、もう少し頑張ろうかと思える場所がない。そこで、前に南雲さんに言われた時に思ったんですけど、「そんなことできる訳がないよ。デザインで人を救うなんて。」って思ったんだけど、「いや、良いものつくって残す」ってことをやって来たんですけど、湯浅さんが言う三番目の「居場所をつくる」というのは、もしかしたら、デザインとか、まちづくりでも出来るのではないかと思うんです。綺麗な駅とか緑あふれる広場とかじゃなくて、この場所だったら自分の場所と感じられて、行くとほっとするよね、あそこに行くくと元気で話している人がいて、その人としゃべっているとこちらも元気になってくる、というような人との関係です。あるいは、今回は駅とか駅前広場ですけど、山の方に行くと、新緑で植物はすごいよね、あるいは、海の方に行くと、こうやってなんの役に立つかわからないけれど、波が押し寄せてきてすごいよね、と。居場所といっても色々ありますよね。癒される場所、元気になる場所、自然との対話ができる場所、あるいは、歴史と対話できる場所、つまり、自分独りで生きているんじゃなくて、徳山も一世代前、二世代前、三世代前の人が出て、徳山っていう街ができています。なんか、そういう話しなんじゃないかと最近思っているのです。それだったら、もしかしたら、できる可能性があると思っています。当然、居場所というのは、人間関係とか自然現象と結びついていると思います。皆さん、旅行されて、そういう経験があると思うんですけど、あそこに行った時に急に雪が降ってきてすごかったよね、とか、ただ景色が良いっていうんじゃなくて。あるいは、あそこに行った時に、全然知らない人なんだけど、気が合って、話して酒飲んで、あの場所は面白かったよねとか。生活の豊かさというのは、選択肢をどのぐらい持っているかという話だと思うんです。居場所の話でいうと、その時の気分によって居場所を持っていて選べるか。逆にいうと、そういう居場所をどのぐらい用意できるのか。僕ぐらいの歳になってくると、もう、60 歳を超えていますから、人生何が良かったかという、どのぐらい思い出を持っているかということが人

生の豊かさだそうです。どのぐらい思い出を持っているのか。思い出づくりの方は難しいかもしれないけれど、居場所づくりの方はデザイン、まちづくりで出来る。その居場所づくりで重要なのは、お金を払わないと駄目ではなくて、誰かのグループでないと入れないとかそういうのではないんです。誰でもアクセスできる、そういう場所をつくる。そういう場所がきっかけになって人間関係が多様になって、増えていく。僕は徳山駅はそういう場所になる可能性が高いと思います。東京から初めてきた人も話ができる。実は、宮崎県に日南市という所があって、広島カープがキャンプやっているところです。そこに呉服屋さんのおばさんがやっているお店があって、「しゃべり場」という看板が掛かっています。誰でも入って、お茶を飲んで、おしゃべりができる。先日久しぶりにそこに行ったんですが、沖縄までヨットで行くという人が来て、なんだか知らないけれど、実に楽しかったんです。そういう人間関係がある。そういうことならお手伝いが出来るのではないかと感じ始めています。お金はちょっと無理だと思うんですけど、デザインとか、まちづくりではね。そういうことお手伝いが出来るのではないかと感じ始めています。それで、そういう場所をつくる時にですね、我々は東京のよそ者ですが、地元の人とそういう一緒につくろうと思っているのですが、できた場所が本当に自分の居場所であるか、自分のものであると感じられるかどうかには条件があります。今まで20年ぐらいデザインの仕事をやってきて大体わかっています。つまり、東京から、あるいは有名な建築家が来て建物を建てて「はい」と与えられた場所をどう感じるか。そうじゃなくて、その建物、今度のことでいうと、駅ビルと駅前広場になると思うんですけど、例えば僕とか小野寺さんが設計したベンチを使って下さい、と言うのと、いや地元の人が出て行って、徳山はこういうものが好きなんです、こういう石が良いんだよ、とデザインをしてる過程に加わってできたものはちょっと違うんですよ。あるいは、日南の油津というところでやったんですけども、小野寺さんと設計したんですけど、実は地元の大工さんが一緒になってつくっています。つまり、普通にいうと、地場の伝統技術をそのデザインに入れて、東京のよそ者と地元の人と一緒に、そうなるをやっぱりあれですよ。周南市がつくったんだけど、あれは10分の1は自分のアイデアが入っているんだよ、となるんですよ。そうすると、居場所なんだけど、もう一步突っ込んで考えると、自分のものとして考えられるか。公共施設というのは危ないですよ。公共というからみんなのものなんだけど、誰のものでもない、となってしまう。これは自分の時計だから愛着あります。この服も自分のものだから愛着があります。この建物に愛着を感じるかと言うと感じないですよ、僕は。つまり、自分のものだと思っていないから。公共というのはみんなのものなんだけど、下手をすると誰のものでも無くなるんです。誰も愛着を持っていないから。今度できる駅ビルとか駅前広場とか、もっと広げて街のそこかしこです。自分が参加したとか、自分が一緒につくったとか、そういう、公共のもので自分のものではないんだけど、自分のものだと思える場所をどのぐらいつくれるのか。それが非常に重要な問題だと思っています。それから、東京組の我々からいうと、我々は一応デザインのプロですから良いものはつくります。だけど、良いものをつくって、皆さんに「はい、どうぞ。」というとまずいので、一緒につくりましょう、いっしょに考えましょう。だけど、良く言うように市民の皆さんの言うことを全部聞きますよ、ということはないですよ。なんでかという、周南の市民は、ここにいる人達だけではなくて、皆さんの小さなお子さんも市民で、そのまたお孫さんも市民です。例えば、駅とか駅前広場をつくったら、少なくとも30年、50年使います。だから、今つ

くったら、今使う人だけが市民ではない、将来の人のことを考えたら、今はこうかもしれないけれど、20年、30年、あるいは50年先を考えたら、こうゆうデザインの方が良いですよということになるかもしれない。そろそろ話は終わりますけれど、皆さんに一つだけ考えて欲しいのは、自らの居場所マップを作って下さい。自分の居場所はどこにあるか、どうゆう居場所が不足しているのか、どうゆう居場所があったら楽しいのか、生きてる感じがするのか。もっと絞っていくと、駅と駅周辺の街にどうゆう居場所をつくったら良いのか。そうゆうことで、暗い出だしでしたけれど、割と明るく終わったのではないかと思います。どうもありがとうございました。

●司会

篠原先生、大変貴重なお話をありがとうございました。篠原先生には後ほど行います、パネルディスカッションのコーディネーターもお願いしております。会場の皆様、もう一度盛大な拍手をお願いいたします。

それでは、続きまして「徳山駅周辺整備基本計画及び今後のスケジュールについて」ということで、周南市中心市街地整備課課長補佐の中村から、説明させていただきます。それでは、よろしくをお願いいたします。

●中村補佐

皆さん、こんにちは。本日はシンポジウムに多数お集まり頂きまして、どうもありがとうございます。私は、周南市中心市街地整備課の中村と申します。どうぞ、よろしくをお願いいたします。

周南市では、昨年12月、といたしまして先月ですが、基本計画の策定をしております。これは、北口の駅前広場、南口の駅前広場、そして、南北自由通路について基本計画を策定いたしました。今日はその計画について説明させていただきます。

この駅の基本計画は、先ほど篠原先生がおっしゃられました自分の居場所となるような計画になっているかどうか皆さんに判断して頂きたいと思っております。それでは、座って説明させていただきます。

今回、徳山駅周辺整備基本計画を策定するに当たり、まちづくりに多くの経験を有する学識経験者や地元の関係団体の代表で構成する「徳山駅周辺デザイン会議」を立ち上げ、その中で協議をしてきました。平成20年12月に第1回目を開催し、これまで5回開催しています。また、シンポジウムは今回で2回目、昨年8月にはパブリックコメントも実施し、多くの市民の意見を反映させてきました。このように、検討を重ねた上で、昨年12月に基本計画を策定しております。基本計画を策定する上での徳山駅周辺のまちづくりの目標としましては、「徳山駅を中心とした歩いて暮らせる集約型の交流まちづくりの実現」を掲げています。

これは、今後駅周辺をどのように整備していくのか、現状の課題を抽出した中で、目標を定めたものです。

徳山駅周辺整備事業では、整備するものにつきましては、北口の駅前広場、南口の駅前広場、それらを連絡する南北自由通路と橋上駅舎です。それと、駅ビルの建替えを行います。この駅周辺整備を行う上で、必要な機能としましては、鉄道、バス、タクシー、自家用車、自転車、歩行者を結びつける広域交通としての交通結節機能、様々な人が、集い、憩い、楽しむための拠点となる交流機能、そして、周南の玄関口として市民の誇りとなるようなシンボリックな機能、これらの機能が必要です。

それでは、具体的にどういう点に着目して、基本計画を策定したかということですが、北口駅前広場の現

状の課題をあげると、全体的にバリアフリーに対応していません。次に、バス利用時の利便性が悪いことがあげられます。バスの降車場は市道をはさんで広場の北側の御幸通りであって遠いということ、また、バスの乗車場も駅から大きく回り込んでバス停に行くこととなります。全体的に歩道が狭く、その歩道はただ歩行するだけの機能となっています。特に広場の東側や駅ビルの前の歩道は狭く、すれ違うだけでもストレスを感じることがあります。憩いや潤いのスペースもほとんどありません。さらには、広場に車道が接続しており、歩行者動線と車両動線が交錯し、歩行者の安全性や快適性が妨げられています。

この写真は、御幸通り側から駅前を写したものです。今、課題を述べましたようにそろそろ、将来を見据えた整備に、着手すべき時期にきています。

この写真は、駅ビルの前の歩道の様子を、早朝、写したものです。駅の改札口からでてきた人であふれています。仮にここを逆方向に進む、それを想像してみてください。人をよけるのに大変です。

これは広場東側の状況です。先日の土曜日に撮影したのですが、ゆとりのある空間とは、とても思えません。

南口の駅前広場ですけれども、この課題は、まず、広場と県道の交差点が食い違いになっていて、円滑な交通処理ができないということです。また、全体的にバリアフリー化されておらず、歩道も狭いというのが現状です。

広場から出る道路が、港方向に真っ直ぐなっておらず、信号待ちの車は、県道と平行に停まって待つというこのあたりでは珍しい変則交差点になっています。

次に、南北を連絡している地下道につきましては、階段しかなくバリアフリーに対応していません。さらに、暗くて、狭くて、特に夜間はこわい、そうゆう印象があります。

北側の入り口の様子です。これが、南口です。この方は、持っていた傘を杖代わりにして、荷物を重たそうに持って、階段を昇られていました。通路内部の写真です。幅3m、高さ2.5m程度しかなく、1人で歩くと、あまり気持ちのいい場所ではありません。

以上のような課題に対して、どのように整備していくかということですが、北口駅前広場におきましては、広場内の車道を曲線とし、動線を滑らかにします。このことで、バスの乗車場への歩行者の移動もスムーズになります。バスの乗車場とタクシープールは広場中央へ設け、現在御幸通りにあるバスの降車場は広場の中に設置し、利便性を高めます。一般車の駐車場は駅ビル西側に設置する計画です。また、駅の近くに身障者用と一般車の停車場及びタクシー乗降場を配置します。バスと一般車の動線は現在と同じで、ほぼ分離し、安全性を確保します。

広場の東側と南側に広い歩行者空間を整備します。南北自由通路は新幹線の駅舎の関係でこの位置に整備しますので、それで、特にこの東側の空間を重視し、小広場と駐輪場も整備します。また、建替え予定の駅ビル1階を吹抜けのピロティ構造とすることで、実質的な環境空間は、現在の広場の環境空間に比べて約3倍となります。みなみ銀座通りにつきましては、現在は広場に接続していますが、JRの線路沿いに道路を配置し、東側に接続することで、広場内の歩道を車道で分断しないようにします。

これらの整備のため、広場を4m駅ビル側に拡幅します。また、これは、駅周辺整備全体に言えることですが、バリアフリー、ユニバーサルデザインを推進します。広場のデザインにつきましては、地元産の資

材の使用等に留意しながら、周南の玄関口にふさわしいデザインとするよう、今後の設計を進めていきます。

この写真は、現在の北口駅前広場の東側について、整備予定の歩車道の境界のラインを、チョークで示したものです。現況と整備後の歩道の広さの違いを、わかりやすく表示しています。駅ビルの3階から眺めると、現況と整備後の違いがはっきりわかります。整備後の歩道の広さをイメージしていただければと思います。ぜひ、駅に行って、駅ビルの2階や3階に上がって現場を見ていただきたいと思います。歩道の広さを実感することで、広場のデザインの意図が理解していただければと思っております。

南口駅前広場につきましては、広場を西側に拡張して、変則交差点を改良します。また、環境空間の充実や施設の機能的な配置、バリアフリー化を図ります。

南北自由通路ですが、人が余裕を持ってすれ違い、また立ち止まって話ができるよう幅員を8mとして、線路上空に、屋根をかけて整備します。軸線を真っ直ぐに通して北と南を連絡し、自由通路と、新幹線と在来線の改札口、駅ビル2階と接続し、だれにも利用しやすい動線に配慮します。

駅ビルにつきましては、まだ基本計画を定めていませんが、施設内容につきましては、これまで公民連携まちづくり委員会やデザイン会議などで多くの案が提案されてきていますので、考え方をお示しします。コンビニ・レストラン・カフェなどの「にぎわいの支援の空間」、市民交流、学習、休憩スペースなどの「憩いの空間」、会議室・ホールなどの「集いの空間」、それと交番や、誰にもつかいやすいユニバーサル対応のトイレなどが提案されています。駅ビルが活気であふれ、そのことが周辺商店街などに波及していくような施設配置を考えていきたいと思っております。施設内容だけでなく管理運営も含めて、今後さらにデザイン会議で議論を深めていく予定です。

駅ビルのデザインにつきましても、会場左手に模型にして、考え方を提案しています。後ほど、休憩時間にご覧ください。岐山通り、御幸通りの緑の都心軸を受け止めた周南市のシンボルとなるようなデザインとしたいと考えています。施設内容と併せて、今後検討していきます。

今後のスケジュールですが、現在、南北自由通路・橋上駅舎・駅前広場の基本設計を実施しています。22年に実施設計を行い、23年度着工予定です。工事の進め方としましては、まず、南北自由通路と橋上駅舎の整備を行い、駅の機能を線路上空に移転した後、駅ビルを解体して、新駅ビルと北口駅前広場を整備します。南口駅前広場は、他の工程に左右されませんので、関係機関との協議が整い次第着手し、早期の整備を行います。今後は、徳山駅周辺整備事業の早期の完了に向けて、着実に事業を進めてまいりますので、皆様方のご協力をよろしくお願いしたいと思います。

中心市街地整備課では、中心市街地の活性化に取り組んでいます。徳山駅周辺整備事業は、その中でも最大の事業ですが、昨年末に、社会実験にも取り組んでいますので、この場をお借りして、その結果を簡単に報告いたします。

「公・民連携まちづくり委員会」とは、市民と行政が一体となって、中心市街地の将来像を検討しているものです。これまで、駅ビルや港について考えてきました。21年度は、この公・民連携により、活性化を念頭においた社会実験に取り組みました。これは、やる気のある人が集まり、自らがテーマを定め、ワークショップなどで企画を立案し、実行に移したものです。

実験1として、地域ならではの食のサービスの提供をテーマとしました。新たな飲食店や物品販売店の展

開の可能性を検証するため、まちなかの空き店舗を活用して、店をオープンしました。「もち bar のぞみ庵」、
「陶工4人衆と仲間たち」など個性的な「おみせ」を運営しました。

「もち bar のぞみ庵」は、元のふぐ横丁のところで営業しました。徳山高専が学園祭で作った屋台の材料を一部再利用して、木のぬくもりと懐かしさを感じる店になりました。「望みの家」という施設に通っておられる方やその保護者の方で運営されました。これが店内の様子です。創作井の中のひとつ「かりかりチキン井」です。私も何回か食べましたが、これがワンコインですむのなら、将来的にも期待が持てると思いました。

PH通りにオープンした「陶工4人衆と仲間たち」です。作家によるアクセサリーや雑貨、陶芸などの展示、販売を実施した個性的なお店でした。

実験2は、高質な空間の提供というテーマで実施しました。「冬のツリーまつり」の際、御幸通りと青空公園でツリーの点灯が実施されていますが、それらを連絡するPH通りにも灯りをともし、高質な空間を創出し、イメージアップ効果を検証しました。これは、昼間のPH通りの様子です。PH通りの両側には2,000本のペットボトルを並べ、灯りをともしました。地域の皆様のご協力により、歩行者天国にして実施することができました。ペットボトルを加工して、キャンドルを作成しました。ペットボトルの外側には、幼稚園、小学生に描いてもらった絵をはりつけましたので、その絵を見にこられた人も、多かったようです。手作りのキャンドルも、300個並べて、アクセントをつけてみました。

実験3は、新たなレクリエーションの提供をテーマとして2つ実施しました。1つは12月23日、ツリーまつりの集中イベントの日に併せて、夜間の動物園を開園しました。もう1つは、12月31日、周南コンビナートの夜景を海上から楽しみながら年越しを迎える「年越しカウントダウン徳山湾クルーズ」を実施しました。これらを実施することで、新たなレクリエーションの需要の可能性を検証しました。

夜間動物園実施のポスターです。動物園入口のイルミネーションはこうゆう風にしてみました。「つよし」君のぬいぐるみも、出迎えてくれました。このように、いろいろ工夫して、盛り上げました。春や夏にも夜間動物園を開園しているのですが、冬の夜に開園したのは、初めてでした。夏の夜は、もう少し来園者が多かったのですが、やはり寒さのせいでしょうか。

シャトルバスを運行し、ツリーまつり集中イベント会場と連絡し、車で来た人に夜間動物園とツリーまつりの両方を楽しんでもらおうという狙いでした。

これが年越しカウントダウン徳山湾クルーズのポスターです。徳山港を出発して、西に向かい周南大橋のあたりで折り返して、また出光の沖まで行って、また徳山港へ帰ってくるというコース設定をしました。これが昼間のコンビナートの様子です。大津島巡航の「鼓海」をチャーターして、出発しました。船上からのコンビナートの眺めです。これは東ソーの夜景です。同じく、これは出光の夜景です。船上からコンビナートの夜景を見ている様子です。みんな寒そうにしていました。募集定員に近い70名の参加がありました。0時に併せてカウントダウンを行い、クラッカーで新年を祝いました。船から降りた後は、ふぐ汁をふるまいました。ふぐ汁を食べてもらい、幸せな気持ちで新年をむかえていただきました。

以上が社会実験の報告です。

この社会実験の結果を十分検証し、今後どのように活かしていくかが重要です。今回の社会実験で再認識

したのは、可能性を秘めた地域資源がたくさんあるということです。そして、それをどういかしていくかは、やはり人が大事ということです。公・民が連携したまちづくりということで、我々、中心市街地整備課の職員は全力で取り組みましたが、それ以上に民の力が大きかったと思っています。この場を借りて、協力していただいた方にお礼申し上げます。ありがとうございました。この地域資源と人に、うまくソフト事業をからめて活性化に取り組んでいきたいと思っています。

今後は、まず第1に、徳山駅周辺整備事業を着実に進めていこうと考えています。それと併せて中心市街地の活性化にも取り組んでいきますので、皆様のご協力をよろしくお願いします。以上で、周南市からの徳山駅周辺整備基本計画についての説明を終わります。ご清聴ありがとうございました。

●司会

ありがとうございました。それでは、皆様、次は「パネルディスカッション」でございますが、会場の準備等がございますので、ここで休憩をさせて頂きたいと思っております。これからおよそ15分間の休憩に入らせて頂こうと思っております。皆様におかれましては、午後3時、3時までに席にお戻りいただくようお願いを申し上げます。

それでは、お時間になりました。皆様、お席の方にお戻り下さいませ。大変長らくお待たせいたしました。

それでは、ただ今から「パネルディスカッション」を始めさせていただきます。「後世に何を残すか」をテーマに、ディスカッションを行っていただきます。

では、パネリストの方々をご紹介させていただきます。最初に、東京大学大学院教授 内藤廣様です。内藤様は建築家としてもご活躍されており、「徳山駅周辺デザイン会議」の副会長であります。

次に、東京大学大学院准教授 羽藤英二様です。羽藤様は交通計画がご専門で、「徳山駅周辺デザイン会議」の委員であります。

次に、徳山商工会議所会頭 藤井英雄様です。藤井様は、徳山海陸運送株式会社代表取締役社長であり、「徳山駅周辺デザイン会議」の委員でもあります。

次に、山口県建築士会徳山支部支部長 村越千幸子様です。村越様は山口県で最初の女性の建築士となられ、1級建築士事務所村越ちさこ設計室の代表としてご活躍されています。また、「徳山駅周辺デザイン会議」の委員でもあります。

そして最後に、国土交通省中国地方整備局建政部都市調整官 筒井祐治様です。

なお、パネリストの皆様の詳しい経歴につきましては、お手元のシンポジウムのチラシをご覧いただきたいと思っております。各パネリストの皆さんは、景観、建築、交通、まちづくり分野における専門家、及び、周南市でまちづくりに取り組まれている方でありますので、貴重なご意見を伺う、またとない機会でございます。

また、意見交換会の中で会場にお越しの皆様から意見をお伺いしたいとのことです。コーディネーターには、先程、基調講演でお話頂きました篠原修先生にお願いします。それでは、篠原先生、よろしく申し上げます。

●篠原コーディネーター

では後半戦ということで、4時半ぐらいまで進めたいと思いますので、よろしくお願いします。それから、今、お話がありましたように後半の部分では多少時間がとってありますので、会場の方々からも質問とか意見を頂きたいと思います。よろしくお願いします。そうですね、最初は一人5分と短い時間なんですけれども、自己紹介を補足して頂いて。ねえ。だって、交通の専門家ですと行っても、何をやっているんだろうなということですね。実際にはどんなことをやっているのかを話して頂いて、それから、徳山駅というか周南では、まちづくりが始まろうとしているんですけど、まちづくりに対してどんなことを考えているのか、思っていることを短い時間ではございますけれども、お話頂きたいと思います。よろしくお願いします。では、内藤さんの方からよろしくお願いします。

●内藤パネリスト

内藤でございます。よろしくお願いします。どうやって自己紹介したら良いのか迷っていますが、本業は建築家で仮の姿が東京大学の教授と考えて頂いても良いと思います。まちづくりを篠原さんと一緒にやるなかで、10年ほど前に大学に来て教えてくれないかということで、建築家なんですけど、土木の教室で、デザイン、まちづくりを教えるということをやっています。言ってみると、篠原軍団の一員と言っても良いかもしれません。先ほど、小野寺さんとか、南雲さんとか名前があがりましたが、その他に、佐々木さん、都市計画の佐々木さんとか、そういう人たちと一緒にまちづくりをやっています。

これまでわかりやすい例では、日向市という宮崎県の駅の連続立体交差事業という鉄道の高架事業と一緒にやり、まず駅の設計をやり、さらに、まちをどうやって変えていくのか、駅の設計だけやってもしょうがないじゃないか、まちが良くなるとしょうがないじゃないか、と最初の頃から言っていて、もう既に高架事業と駅はとうの昔に完成して、小野寺さんや南雲さんがデザインした広場も終わっているんですけど、我々は引き続き、まちづくりに加わっているということです。それぞれの専門知識を活かして、まちづくりに関わり続けているというメンバーの一人です。私は建築の知識をできるだけ利用して、もちろん建築外のことでも出来るのが沢山ありますので、そういうものを使って、まちづくりに参画をしています。印象としては、日向とかそれ以外のところでも、まちづくりを幾つもやっていますが、まちづくりに終わりは無い、何か作って終わりというのは嘘で、大変ですけど、一旦お付き合いが始まったら、ずっと付き合い続けるというような感じでいます。先ほどの篠原さんの言葉でいうと、不思議なことに、まちづくりをやっていると僕らの居場所が段々できてくるんです。ですから、例えば、もう10年以上もお付き合いしている日向市では、篠原さん、私、南雲さん、小野寺さんの居場所がしっかりあります。行くと帰ってきたような気持ちになるんです。徳山もそういう場所になれば良いかと、篠原さんも思っているし、私も思っています。そういう人間です。詳しくは後ほどまた話したいと思います。

●篠原コーディネーター

内藤さん、まだちょっと時間があるので。日向もやったけれど、北海道の旭川もやったのです。旭川は平成8年からですから、もう14年ですか。ちょっと地域性みたいなものはありますか。日向というのは南国

で、旭川は北で。

●内藤氏パネリスト

ものすごくありますよね。同じ街なんて一つも無いというのが僕の印象ですね。住んでいる方の気質も違うし、食べ物も違うし、気候風土も違うし。日向はやっぱり当たっているか分かりませんが、そんなに豊かな街ではないですよ。徳山なんかと比べると財政的には遥かに厳しいと僕は思います。だけど、人はあったかい。それがあそこの場所の良いところ。それから、旭川はなかなか厳しいところがあります。気候も厳しいし。ただ、北海道人の気質というのは深くこだわらない。逆にそれが良い方向にできれば良いと思います。

じゃあ、徳山はどうなんだという、なんとなく未だわかりませんよ。お付き合いが短いので。でも、やはり児玉源太郎かなと。つまり、戦略性と人間性みたいなものが組み合わさっているというか、そういう感じがなんとなく思っているんですよ。委員会での皆さんの発言をきいていても、ものすごく論理的に答えられる。そこの前の方に僕の知り合いの建築家の人も居ますが、どちらかというところとちょっと理屈っぽい。理が立つというか。私はそれが良い方に転がって街が元気になってくれるといいと思います。

●篠原コーディネーター

どうもありがとうございました。続けて、羽藤さん。羽藤さんは松山ですよ。松山の話じゃなくて良いんですけど。児玉源太郎と関係があるんですか。

●羽藤パネリスト

私も最初に市長から児玉源太郎の遠縁とか親戚とか言われたのですが、正確には私の教え子が児玉源太郎の血筋でありまして。そういう意味では、篠原先生の場合は師匠さんが、私の場合は弟子筋が縁があるということで面白いなと思っています。というのを最初に訂正させて頂いた上で。

私の専門は交通計画です。交通計画を私も色々な地域でやってきたと言いたいのですが、実は私は内藤先生や篠原先生と違ってですね、最近まではずっとコンピューターのプログラムばかりを書いていた人でした。コンピューターのプログラムというのは、どうゆうことかという、渋滞を改善するために、どうゆうことをやると、どれぐらい渋滞が解消するのかという理論をずっとやっていたんですよ。で、ずっとやっていたんですが、どうも3、4年前、正確にはもう少し前から、「どうもおかしいな」という感覚が芽生え始めていたんですが、どうもそういうモデル、交通計画が上手くたてられない空気がその頃から出てきたと。それが何なのかは当初よくわからなかったんで、3、4年前ぐらいから、日本中、世界中、あちこちの交通の現状を見るようになりました。3年間ぐらいで500回ぐらい飛行機に乗って、とにかく色々なところに行ってきました。

で、何が起きているのかというと、言ってしまうと、日本の場合はすごく大きな変化というのは、高齢化です。高齢化と言ってしまうと、ここに居られる皆様は実感として「高齢化、大変だよ」とそれだけの

話しかなと思うんですが、移動・交通において高齢化が進むというのはすごく大きな変化です。皆さんは、自分たちの周南という街の都市計画とか交通計画を考えられる際に、今までは、小学校区、こうゆうものを基本に考えて、色々な計画がたられてきたと思うんです。例えば、東京でも 2050 年の東京を予想すると、65 歳以上の世帯主は今の 3 倍になります。お父さんがいて、お母さんがいて、お姉さんがいて、弟がいる、この世帯は今の 6 割。東京で、ですよ。そうすると今想定している計画、交通計画が成り立たなくなるんですね。これが、一番先に現れているのが、私、今、全校生徒が 10 人ぐらいの愛媛県の小学校に行っているのですが、そうゆうところでは顕著で、ようするに日常の移動ができない人たちがものすごく溢れ始めている。非常に問題がおきている訳です。もちろん都市部でも、バス停から 100m 以内に住んでいる高齢者の方はそこそそ外出率が高いんです。それより遠くに住んでいる方はぐぐっと外出率が下がってしまう。もちろん、本当に元気な方は車で動かれるんですが、そうじゃなくなる時はいつか来ますから、そうなった時に公共交通が近くにあると、自分で意思をもって動ける。もちろん、これは素晴らしいことだと思うんですが、そのように、移動、交通計画、都市計画をめぐる価値観とか考え方がこれから 10 年、20 年かけて大転換を迎えようとしているのが、私がおもっている実感です。そのなかで、周南の今回の駅というところに、篠原先生は居場所というところをかけたわけですが、私なりに解釈すると、今までの交通計画というのは、大体、人間というのは、1日に2トリップ、3トリップぐらいするんです。2つの移動か、3移動ぐらいします。で、これを我々はなんと言うかという、ホーム、ワーク、アザー、ホームという。これは何かという、自宅からまず会社に行って、これで1トリップ。会社からアザー、第三の場所、自宅でもない、会社でもない第三の場所に行ってもう1トリップ。最後に第三の場所から自宅に戻ってもう1トリップです。一日に平均3か、もう少し欠けるぐらいの移動をするということです。これが働いている人を基準に考えているので、そうゆう計画で良かったのが、高齢化が進みますと、ワークが取れるんです。そうすると、一番重要になってくるのは第三の場所です。その第三の場所というのが、篠原先生が言うところの何なのかというと、色々な、例えば、スポーツクラブであるかもしれないし、図書館かもしれない、病院かもしれない。今まで重視されてこなかった、ある程度重視されてきたけれども、計画論では重視されてこなかったことが重要になって、その場所と自宅を結ぶ結節点として駅を見る。その駅を使う人の割合の中で、高齢者の方の割合が増えてくるということ、我々はどう受けてとめていったらいいのか、というところが、我々専門家、そして、ここにおられる皆さんに突きつけられている問題なのではないかと思えます。

●篠原コーディネーター

あの、鉄道にしる、バスにしる、公共交通機関プラス安全に安心して歩ける道っていうのが、重要になってくるわけですよ。

●羽藤パネリスト

元気な時は何でも移動できちゃうので良いんです。だけど、今、リハビリテーション病院の先生と一緒に研究しているのですが、脳卒中なんかで倒れた後なんかは、活動範囲がすごく狭まる。自宅周りになってしまふのです。でも、移動欲求はすごくあるんですよ。これをどうやって満たすかという、自宅周りの街路

空間をどうするのか、あるいは、駅までは公共交通で出て、その周辺だったら歩いて安全に川沿いの緑道に行けるとか、公園に行けるとか、病院にいけるとか、そういう空間をどう質の高い空間に仕立てていくか、そういうことが重要なのです。

●篠原コーディネーター

ずっと家にいちゃだめなんだよね。

●羽藤パネリスト

お医者さんが言うのは、外に出るとというのがリハビリだと。それが一番大事だそうです。

●篠原コーディネーター

それでは、藤井さん、よろしくお願いします。藤井さんは委員会にもいつも出てごられて、何というのかな、明るく思い切ったことを言われるので、非常に楽しいのです。今日もそういうお話になるのではないかと思います。

●藤井パネリスト

いや実は私ね、社員に言わせるとあまり明るくないんですよ。

●篠原コーディネーター

そうなんですか。

●藤井パネリスト

あの、思い切って思っていることを言わせて頂きたいと思います。藤井英雄です。私は、爺さんの代から徳山で海運業をやっています。長いこと海運業をやっている訳ですから本当に幸せだなと思っています。築港で生まれて徳高に行きまして、あと東京で大学に行って、商社に入って。それから、今でも覚えています。東京オリンピックの年に徳山に帰ってきました。今、会社に入って45年目です。51歳で社長になりまして、ちょっと言いにくいんですが、ようするに親の七光りで社長になってですね、一年か、二年は調子よくやっていたんですが、3年目、たしか54歳の時だったと思うんですけど、でかい壁にぶつかりました。その頃はまだ親父も元気でしたから、「いや、わしにはむかん。やめさせてくれ。」と言ったんですね。その時にですね、親父とずっと喧嘩ばかりしていたんですが、親父が「思いつきやってみて、駄目だったら、何時でも会社を潰せ」と言ったんですね。「まあ、やってみいよ」とこう言われて、少し気が楽になって、それでも2代目ですから、古参の社員の人にはずいぶん遠慮しておりました。今みたいに、気をとりなおして「私は社長じゃ、なんでも命令する」と言うて。それまでは古手の社員の人が「藤井さん、こうしたらええですよ」「ヒデちゃん、あんた、これやったら良いかね」と言われました。「社長に向かって、何を言うんか。」とひとこと言ったら気が楽になりました。それからだいぶ頑張りましたが、62歳のときにまた壁に打ち当たって、「いや、これは辞めにゃいけん。」と思いました。「人間、廃業せにゃならん」そこまで正直いって思

いました。さっき篠原先生が3万人とおっしゃっていましたが、その中に入っていきそうなことがありました。それから3年ほどたって、65歳ぐらいの年から調子が良くなって、なんとかやっています。今年は寅年で私は年男なもんですから、この3月で72歳になります。70歳で「商工会議所の会頭をやらんか」と言われたので、「まあ良いかな」と思って、無責任ですが、やりました。街に対する考え方というのは、平凡ですが、徳山の、周南の中心だということです。とにかく人もお金も入ってくるわけですし、若い人達、我々も含めて、所用をするために、イベントをするために、駅にくるわけですから、なんとか駅が立派であると良いなと思っています。皆さんご承知の通り、山陽新幹線はほとんど山の中です。徳山だけは、昔偉い人がいたんですな。新幹線追い越し車線が2本ありますが、あそこを徳山を通る時はものすごく北側に傾いているのですが、新幹線徳山駅がいかに大きなカーブの中にあるのか、と考えると、昔の人は頑張ったんだから、我々もその何分の1かでも頑張らねばいかんかなと思って、今日のデザイン会議に参加させて頂いています。ありがとうございました。

●篠原コーディネーター

壁に当たったことがあるとは知りませんでした。失礼しました。それでは続いて、村越さん、よろしくお願い致します。

●村越パネリスト

村越と申します。よろしくお願い致します。私は建築の仕事をして、主に住宅の仕事が多いんですけども。10年ほど前から建物をつくる建築士というのは、もう少しまちづくりのことを考えなければならぬというのを、建築士会の方から誘われまして、駅ビルのリニューアルのプランだとか、バリアフリーチェックを試みたり、景観ワークショップに参加してみたり、色々なまちづくりに関わりながら過ごしてきました。それは今も続いていて、まちづくりに熱心な建築士の仲間とまちづくり塾ということで、内藤先生のご指導を仰いだりしながら、勉強しているところです。昨年末には社会実験の方でもお手伝いさせて頂いて、建築士の沢山の仲間が参加してくれました。そんな活動をしています。まちづくりとは、というと、やはり、緑は多い方が良い、バリアフリーでなくちゃいけない、車より人が優先な街が良いし、歩いていて楽しい街という周南市が掲げている方針はそのとおりで思いながら、デザイン会議で話させて、注文つけさせて頂いています。でも、この1年間会議を進めながら、話を聞いたりする中で、私の中で、まちづくりというものの本当の意味がわかってきたきがしています。昨年3月にここでシンポジウム第1回ありまして、そこで、お二人の先生方が「日向市駅ができたので、ぜひ見にいって下さい」ということで、百聞は一見にしかずといわれたので、4月に何人かの人たちと早速、日向市駅に行ってきました。日向市では行政の方の説明をうけたり、駅、なんども出たり入ったりしながら、駅舎を楽しんだり、街の様子を見たりしてきました。それから、年末、11月には高知駅にも行ってきました。その両方の駅は篠原先生がデザイン会議の会長を努められてデザインをまとめられたものです。駅舎は両方とも内藤先生が設計されたもので、もちろん木を使ったり、すごく感じの良い、素晴らしい建物でした。一方で、日向市駅では、先ほどのプランニングの中で広い広場があったんですけど、日向は交通広場ではなくて、ちゃんとした広い、良い公園が設計されているん

ですが、それをどう使っていくか。それから、今進んでいる区画整理で出来上がっていく綺麗な街並みとどうやってつなげるか、その中に賑わいをどんな風に取り戻していくのか、というところが、行政の人も街の人と一緒に考えてながら、今、まだ模索中と聞きました。高知駅でもとても立派な駅ができたのに、周りは未だ緑が少なくてちょっと行っても広いだけでちょっと寂しいな、緑が少いなと思ったんですけど、聞いていると、市民の方からもこんな立派な駅舎ができたのに、まわりに緑が少なくて本当に残念なので、高知駅を緑で囲もうという市民運動がおこっているとお聞きしました。高知の表玄関は自然と調和した世界に誇れる素晴らしい駅にするには、これから地元市民が手をかけて育てていこう、作っていこう、とパンフレットに書いてありました。こうゆう2つの事例をみたら、まちづくりというのは、できた時、形ができた時が終わりではなくて、建物や広場が完成した時が始まりなんだよという先生方の言葉が本当に良く分かってきたような実感があります。徳山駅周辺デザイン会議も5回も色々やって、基本設計が大体決まって、これから実施設計に移っていく訳なんですけれども、市民というのが、これから実際に出来た時にどんな風に使いこなしていくのかということが一番問題になっていくのだろう、と思っています。行政の方が頑張っても、そのまちづくりに皆が感心を持って参加できるか、っていうので、まちが大きく変わるんじゃないかと思えます。まちの活性化というのも、一人一人がどうしたら良いのか、まちづくりをどうしたら良いのか、建物側で良いものができても、じゃあどうしたらよいかというのを、ちゃんと意見を出しあいながら良いまちづくりを進めていくのが良いのかな、と一年学びながら、デザイン会議に参加させて頂いています。以上です。

●篠原コーディネーター

ありがとうございます。では、最後になりましたが、国交省にいて、全国のまちづくりを随分見ていられると思うので、筒井さんの方からよろしく願います。

●筒井パネリスト

国土交通省の筒井と申します。私は国土交通省の中で、もっぱら、まちづくりというのをずっとやってきまして、とりわけ入った頃から考えていますのは、どうやって地方、地方都市とか地域ですね、こういったところが、今後50年とかロングスパンで生き延びていけるのかというのをずっと考えてきました。ご存知かどうか、日本の将来人口の推計というのがあります。今、日本の総人口というのは1億3千万人ぐらいいますが、大体2070年ぐらいになると、丁度私の下の娘がお婆ちゃんになるぐらいには、日本の人口は半分になると予測されています。大体、三大都市圏で、東京圏で3千万、近畿圏で2千万、中京圏で1千万人ぐらい、合わせると5千万から6千万ぐらいが三大都市圏に住んでいると言われています。それでは、三大都市圏も同じように減るのかというと、放っておくと減らない。そうすると、今、三大都市圏以外に7千万人ぐらいの人が居るんですけども、下手をすると、1千万とか2千万とかいうオーダーになってしまうかもしれないんです。統計的にごまかしている部分もあると思うんですけども、計算ではそうなってしまうというのがあります。もう一つ、高齢化。高齢化というと、高齢者の方々の人口が増えるのかというイメージがあります。確かに高齢者の方々の人口は増えます。それよりも大きいのは、働き盛りの方々の人口が急減

するということです。結果的に高齢者の方々の人口の比率が高まるということです。したがって、人口が減る中で、とりわけ経済活動の主力を担っている方々が減ってくる。その傾向は地方の方が厳しいものがある。その中で、地方都市が生き残っていくのか、ある種の都市間競争、これが厳しい状況に、今後10年、20年経つうちに、どんどん起きてくるという状況だと思っています。その都市間競争という大変ですが、人口がどうしても減りますので、少なくとも都市として生活していくに相応しい場所としてどう維持していくのかと。これは、当然、一定の居住も抱えなければならぬし、色々な所から訪れてくる人々、交流人口を抱えないといけないと思いますが、なんなんだろう。色々な意味では総合力なんだと思います。言い換えれば、住み良さ、住みよさなのかもしれませんが、それに向けてですね、例えば、都市経済、地域振興策、エコツーリズム、6次産業と言われる農林水産業を維持していこう、福祉をどうしていこう、色々な方法論があります。そういう方法論を試しているところもあります。私も方法論というのが答えになってくるのだろうとは思っていましたが、中々上手くいっている事例が少ないことも知っています。話は変わりますが、私はひょんなことから愛知県の豊川市、豊川稲荷、日本三代稲荷の一つですが、そこの商店会の方々とお友達になりまして、10年ぐらい前でしょうか。昔は年に2、3回ぐらいはそこにいて、チンドン屋と一緒にやっていました。そこは、商店会の方々、当時40歳ぐらいですから、今は50歳ぐらいの方々です。リーダーシップを発揮する訳ではないんですが、ある種独自の価値観というか、ある種自分の街に誇りを持っている、ここに住んでいるということに誇りを持っています、それから、自分の街は自分たちで何とかせよならんという思いが強い方々でした。そういう方々が商店街の衰退に対して、とりあえず祭りでもやってみるかということで、いなり楽市というのを始めました。2万人ぐらい人が集まっています。そういう所を見るにつけ、結局、手法論では、手法論はもちろん必要なんですけれども、まちの活性化という手法論をするための土台がやはり必要なんだろうと思ってきています。土台ってなんだろうって言いますと、豊川の方々がその通りだと思うのですが、まず一つ、まちに明確なイメージがあることが大事なのかなと思います。豊川の場合は豊川稲荷です。そういう街の明確なイメージ、この街の形、この街の姿、それは景観という形であったり、歴史・文化・伝統と色々あると思います。かつ、それになぞらえて、その街に住んでいることに非常に誇りを持っている、愛着よりも誇りです。それに、その誇りを前提に、自分たちの街を自分たちで何とかしなければいけないと思っているということが結局土台なのかなと最近思いだしています。じゃあ、それを、具体的にどうやっていけば良いのかについては、まだ全然思いをはせていないんですけれども、そういうところがあるのかなと思っています。豊川の話でいうと、イベントがようやく軌道に乗ったということで、まちづくりは正にこれからというところではありますけれども。そこらへん、土台としてしっかりしているかなと思います。おそらく、徳山の駅周辺というまちづくりにおいても、皆さんがおっしゃるとおり、基盤をどう綺麗に作るのかももちろん重要ですけども、その基盤を使いこなしていくのか。それは、参画という言葉よりは、むしろ、自分たちのものと思って、自分たちで使いますという発想になると思うんですけども、そこら辺が重要なのかなと思っています。本日はよろしくお願ひします。

●篠原コーディネーター

どうもありがとうございました。そういう話が出たので、ちょっと補足しますと、もう随分前に、地方分

権ということで、それまでは都市計画は、知事の権限だったんですけれど、市の権限になりました。それから、だいぶ前から色々議論はされていたんですけれども、補助金ってありますよね。そういう補助金で地方分権で市が主体でやってやるんだから、お金の使い方は市で考えればよいのではないの、ということで一括補助金の方に進んでいます。これは道路の担当、病院の担当というのではなくて、全部、一括して、市で考えて補助金を使って良いんですよとなると思います。ヨーロッパでは前からそうなんですけれども。そうなったときにどう使うかという話です。安直に考えれば、老人が多いんだから、皆、医療費に使おうということになるんですけれど、そうすると街に元気がでてこないんだと思います。じゃあ、便利にするために道路に全部使いますというのも時代遅れだし。こういう時代になると、ますます市の職員が住んでいる人の意見を吸い上げて、現在、プラス将来に向かって、どういう投資をするか、どうゆう街をつくるか、どうゆう人材を育てるのか、ということが非常に重要で、まあ私の個人的な感じなんですけれども、市は市で考えれば良いというのは、それはそれで建前というか、筋論としては正しいと思いますけれど、むしろ、こうなると、色々な分野で活躍しているよそ者を引っ張ってきてね、街のために働いてもらうかという戦略も重要だと思います。特に横のつながりですね。今までは国、県、市となっていて縦でしかつながっていませんでしたけれど、先ほど村越さんがおっしゃったように、同じ駅をやっている日向市でこんなことをやっていて、こんなことで苦勞して、どうゆう成果を出しているんだよ、とか、横の市同士のつながりがかなり重要になってくるのだと思います。それで、第二ラウンドに入りたいと思いますけれど、もう少し具体的にですね、街の中心部にどんな場所を期待するのか、どんなことをしたいとか、もう少し具体的に駅ビルとか駅広場をどうしたいとかですね、その辺のことを、また一人5分ぐらいで申し訳ありませんけれど、今度は地元組から、村越さん、いかがですか。

●村越パネリスト

はい、地元組ということで、先生の方から言われていた、居場所ですね。居場所が街の中にあるかなと考えてみたんですけれど、私個人は、自宅以外で街にでてどこにいこうと考えると、そうはありませんでした。着るものとか買わなければならないのか、何軒か知っている人もいましたが、それも店を閉じてしまったり、寂しい限りです。それと、一番無いのが、食べに行く所が街なかにはありません。それがちょっと寂しいところです。私は仕事をして、家と職場の往復なので、近所の人にも聞いてみたんですが、割と私が住んでいるところは、出光の近くなので、歩いて街に毎日でる人、自転車で出る人、結構います。毎日出かけている人は、一人の人は病院へ、もう一人の人は買い物とかでした。そういうところで、おしゃべりしたりする居場所があるのかなと思ったら、ちょっと喫茶店に寄るとか、デパートを見てあるく、買わないでも見て歩ける所が良い居場所なんだそうです、女性は。そんなことをお話されていました。でも、私の居場所についてはそんなところなんですけれども。今の駅周辺のプランに関しては、やはり北口の駅前広場は前の時も、いつも言っていることなんですけれども、やはり、皆の憩いの広場を少しでも広く居心地の良い広場を作りたいという思いは変わりません。一月の広報に出ていたんですけれども、昭和30年代の広場が出ていました。なんとなく覚えていました。あそこで良くバスの待ち合わせをしていたのを覚えているんですけれども、すごいおしゃべりではなかったんだなと。あの頃はとっても良いなと思っていたんですけれども。でも、それは

時代にあったことなので、今回ももっともっと広くできたら、少し4回目でプランが変わりましたけれども、そういう空間を上手く使って、あの雰囲気は今風にデザインして、あの広場を市民の手にとり戻したいと思っています。駅を利用する待ち時間で、時間を潰したり、休憩したり、そんなところが良いかなと思っています。南の方の出口というか、新幹線から降りるのは、車で迎えにきてもらうことが多いと思います。エスカレーターが出てバリアフリー化されたので、脚の不自由な方にも楽なように、エスカレーターもエレベーターもありますので。あそこはあまり広い広場ではないんですけども、小野寺先生なのか、南雲先生なのか、あの辺はちょっとおしゃれによそ行きで装いでおしゃれな空間を使って欲しいと思います。北口はみんなの広場、みたいな感じで。それと、ついでに良いですか、駅ビルが建替えになると思うんですけども、最近、二度ほど福山市に行く用事がありまして、新しく福山市の図書館ができました。これこないだ、内藤先生が賞をもらった図書館なんですけれど。二回ほど行ったんですけども、二回とも若いお母さん達がベビーカーを押して、おしゃべりしながら、出たり入ったりしているのを見かけて、とってもそれが感じが良かったので、聞いてみたんですけども。そこには、子育て支援センターとかプレイルームとか、そんなものが併設されておりました。そこで、お母さん達がまだ幼稚園とか保育園に行く前の子どもたちを連れてお母さん同士で情報交換とかをされて、育児の相談とかも、大体日曜祭日を除いて相談できるそうなんです。そこでお友達になったり、交流もありますし、街を歩いてくる人が結構多いと聞きました。高齢化社会になったら、余計、若い人達、子供連れの親子を見るととても良い気分なので、駅ビルもそんな風に使うような公共施設があったら良いかなと思っています。

●篠原コーディネーター

わかりますよ。私にも孫がいますから。

藤井さんも委員会の席上で時々、お孫さんを引き合いに出して、おっしゃいますよね。どうぞ、よろしくお願いします。

●藤井パネリスト

私はそういう話をしますよね、私の友人なんか、今の子供はパソコン、ゲームしか興味が無いので、誰もこないと言うんですけど。私は毎年7月20日ごろに海のイベントを企画しておりまして、去年も一昨年も子供魚まつり、と題してですね、一昨年はアジとタイを潮だまりに入れて、30万円分突っ込んで、好きに釣れということをやったんですね。その次の年は、手づかみでやろうと。海の魚を手づかみにすると子供が怪我をしますから、鮎にしよう。海の日と鮎というのもちょっとそぐわないんですけど。やってみようという、子どもたちが一生懸命追いかけるんですね。もうびしょ濡れになって。中には水の中に潜る子までいる。手でつかみやすいように、せいぜい、20センチぐらいしか水を入れてないんですよ。すいません、もう一年やりました。去年は、もう一回海の魚を好きに取れというのでやりました。僕、遊園地とか公園とかどこにいても、池に入るな、魚はとるな、と書いてありますけれど、池に入って魚を好きに取れといったら、子供が喜ぶのではないかな、私の孫も喜ぶんじゃないかなと思います。ぜひ、駅前に。実は、市の広報に出ていましたけれども、我々が学生の頃は駅前に池があって、私、酔っ払って、池のところで3時間ぐ

らい寝ていたこともあります。そうです、この写真です。こうゆうムードのものになると心が安らぐなと思います。

●篠原コーディネーター

これ、色々できます。誰に言えば良いんだろう。あの、日向市の駅前で、噴水出て子供が遊んでいるところを出して下さい。日向駅は熱いところだということで、地下から水を出しているのです。僕は直接話を聞いていないのですが、水の施設はお金がかかるので、メンテナンスが大変なんで、市長は大反対だったんですね。そしたら、市の熱心な人が大勢で市長のところへ談判に行って、市長は団交かと思ったんだそうです。団交って随分古い言葉ですけど、団体交渉ですけど。それで、やっぱり水を作って欲しいということで、水を作ったら、子供は大喜びなんです。水は面白いんですよ。徳山でどれだけデザインができるかわかりませんが、できたら楽しいと思いますよね。ありがとうございます。羽藤さん、さっきちょっと高齢化とモビリティの話をして下さいましたけれど、徳山版でいうと、どの辺りが問題になるというか、大事ですかね。

●羽藤パネリスト

高齢者の方、病気になって体が不自由になった方に聞いていると、一番大事なのは、まず、そんなに長い距離を歩けないので、ちょっと休む場所が街のあちこちに欲しいということですね。それと、横断歩道を渡る際に、長い距離歩くと渡切れない場合があるんですね。我々が考えていると「こんなところが」というところが、そうゆう方にすると、ドーバー海峡のように、果てしなく思えて、まったく街を楽しめないということがあがるようです。そう考えていくと、いかに人が歩ける空間、それを戻していくということですね。もともとは50年、100年前を考えると徳山もそうゆう場所だったということですけど、そうゆう空間、これから人口が減少していくというお話がありましたけれど、そうしていくというのが、たぶん筋だろうと。じゃあ、それをいっぺんにやっ飛ばすなんていうのは無理なんで。それは、我々の諸先輩方がやってきた道路を作っていこうというのと変わらない、短絡的なので。何か、順番に、こうゆう公園があるから、そこが高齢者の方も休めるし、皆が集まれる場所になるように、皆で集まって、先ほどあったようにライトアップとか社会実験とかやってみるとか。そこにつながっている道路を一時的にでも良いから歩行者専用空間にして、そこで何か出店でもやってみる。それがアーケードにつながって、駅までつながっているという様な、使い方の社会実験。今年度かなり盛んに周南でやられたということで、私も勇気づけられたんですが、ああいう活動を駅を中心にして考えた時にどういう風に連鎖していくのかをですね、次年度続けてやっていくあたりがキーなのかな、という気がいたします。

●篠原コーディネーター

僕がちょっと居場所とか言いましたけれど、「あー、このベンチは僕のベンチだよ」というのが欲しいんだよ、きつとね。

●羽藤パネリスト

私がお付き合いがある方々は、マイベンチがオープンスペースの所にあると。奥さんから言われて「あなた、家にいると、ずっと寝たきりになるわよ。」と、結構、夫婦だと辛辣な会話もあるらしいんですが、だから、魚を買いに行けと。だけど、ずっと歩くと大変なので、だから、ここで休むと。そこに座っていると、今まででは生まれなかった会話が生まれる、と。そこが一番重要なんですね。

●篠原コーディネーター

あのちょっと言いますと、日向にこの間、久しぶりに行ってきたんですが、内藤さんと親しくしている鈴木さんという地元の建築家が小さい女の子を連れてきていたんです。「子供なの？ いくつ？」と聞いたら、「そうです。1歳半です。」ということで、「なんでここにいるの？」って聞いたら、奥さんが家の掃除をするので「子供とあんたがいると邪魔なのでどこか行ってくれ」といわれて「どこも行くところがないし、駅前広場に来ると楽しいから、子供を連れてきたんです。」と言うんですよ。それで子供は駆けまわっていて。やっぱり、そうゆうのはダメですよ。家にしか居られないというのはダメですよ。で、内藤さん、徳山はどうですかね、これから。

●内藤パネリスト

徳山ですか。徳山は可能性が沢山あるんじゃないですか。あの、まず一つは、僕思ったんですけど、10年ぐらい前かな、一度来ているんです。古い駅ビルを使って何かすごく活動していて、すごく良いよな、と思ったんです。それから、色々なことを展開する、展開能力というのがあるので、上手く仕立てれば色々なことが可能だと思います。あの、広場をどうやったら、村越さんが「取り返せる」と言っただけで、そうなるのかとか。ちょっと発言しても良いですか。さっきは自己紹介だったので。短くちょっと良いたいことをまとめます。

●篠原コーディネーター

別に無理して短くしなくても大丈夫ですよ。

●内藤パネリスト

あまり話しすぎると藤井さんの発言時間が減ってしまうので。印象だけ言い忘れたんですが、「どこいくの？」「いや、周南に、今度出張に行くんだよ。」「周南ってどこ？」って言われるんですよ。「周南って、ほら、徳山。」っていうと、「徳山ってどこだっけ？」と大体、東京だとそうなります。周南って言うのと、徳山って言うのが、上手く一致していないと思うんです。さっきも周南っていつたり、徳山って言ったり、徳山駅って言ったり色々ですよ。これはやはり、まちの戦略として、もちろん合併とか色々ありますけれどね、どうしていくんだらうというのがありますよね。基本的には周南市の徳山駅。こういう風に胸を張って言えるようになるべきかな、と思っています。じゃあ、どうすれば良いのかっていう第一印象を言います

と、最初に、僕が話を聞いた時は、徳山っていうのはアーケードがすごく発達した街です。実際に来てみると、そちらの方に計画図がありますけれども、歯抜けでパーキングが散在する。これは羽藤さんが結構おもしろいって言っていましたけれども、言い方を変えると、アーケードの先にパーキングのある街、これは結果としてなっているんですよね。これだけじゃ足りない。今度、駅を中心に整備する訳ですから、駅と駅から広がるアーケードとそこにパーク&ライドができる駐車場が接続しているという風にイメージが重なってくると、周南の徳山駅っていうのがわかり易い姿形をとるんじゃないかと思います。今は真ん中が良く分からないという状態になっているので、イメージもバラバラになっているなという印象があります。それが1点。それから、2点目。ここはちょっと強調させて頂きたいので、話をしますが、先ほどから日向市という話が沢山出ました。日向もまだ途上です。一生懸命、皆でやっていますけれども、私の思いとして、上手く行かなかったところがあるんです。それは何かというと、今、彼らが頑張っています。若い世代の建築家が少しずつ、まちづくりに参画していますが、まちとか計画の、10何年もやっているのに、建築家達がほとんど乗ってこなかった。これは、僕はもちろん、ワークショップをやったり、議論をしたんですよ。けれども、もう一つ理解が足りなかったですね。本当は建築家というのは、もっとまちづくり、街に出て行って、一緒になって、まちづくりをやるべき人たちだと思っていました。徳山では是非とも建築家の力を最大限引き出して、まちづくりができれば良いなと強く思っています。それは、日向でもできなかつたし、高知でもできなかつたし、旭川はまだありますけれども、旭川もあまり出来ていないということで。それは、たぶん、篠原さんも同じ思いだと思いますけれど。生活をしている人の一番身近にいる建築家の力を使って、あるいは彼らに最大限、まちづくりに貢献してもらって、「街を作り替える」というぐらいの意気込みで本当はやっていくんだろうと思っています。大体そんなところですよ。

●篠原コーディネーター

そこまで言ってもらったんで、日向で何故上手く行かなかったのかっていう、内藤さんりの理由を言ってもらって。そこをクリアにしないと。

●内藤パネリスト

話はちょっと立ち入ったことになりましたが、普通、皆さん、建築家っていうと、俺が建て主で設計士ということになりますね。それから、行政の側からすると、業者、設計業者っていう言い方になります。つまり発注される、要するに請元になるんですね。で、そうすると、建築家達はしょうが無い、施主がいるからしょうが無い、行政がいるからしょうが無い、そういう所で設計をしている訳です。だけど、実は建築家というのは、いわゆるモノを作る技術にも通じていますし、そのものを成り立たせる法律にも通じていますし、何よりもそれを使う人の気持ち、いわゆる心理にも通じている訳です。この人達が上手く機能すれば、きっと街は良くなると思っていますので、そこは発想の転換が必要なんですね。単なる業者で終わっている人がいると。もうちょっと、直接的に言うと、工務店とか大工さんの確認申請業務をほとんど仕事にしている人たち、これを僕は悪いとは言いません。それも仕事です。日向の場合はそういった人たちが割とレベルの高い層なんで、そういった人たちと年中話していたんですけど、そういった人たちが良い人たちなんです。

わかるんだけど、出来ないんです。つまり、まちづくりとかそういうことに意識が向いたことがなかった人たちがやっているわけです。私はもう、3、4年経った頃に「これはもう駄目だから、皆さんの息子の世代を出して下さい」と言って、若い世代とワークショップを始めて、彼らが今本当に良い仲間になっていて、まちづくりの主力になりつつあります。先ほどの篠原さんから名前が出た鈴木くんなんてのは、NPOで街なかに入って行って、自分でどんどん居場所を作っているんですね。そういうことも始めていますので、徳山ももっと面白いことができるんじゃないかと思っています。

●篠原コーディネーター

あの日向の居場所、なんて言う名前でしたっけ。

●内藤パネリスト

「すみつぼ」っていう、小さな全部で八畳ぐらいです。ギャラリー「すみつぼ」って言って、閉鎖店舗を作り替えて、小さな誰でも寄れるような溜りスペースを作っているんです。もちろん素人ですよ、皆で、市の人も集まって、4、5人で作ったんです。結構、その利用率が高くて、ギャラリー「すみつぼ」は第二「すみつぼ」を作るんだと言う事で場所探しをしている最中です。そういうこともあります。

●篠原コーディネーター

ちょっと畳をひいてあったりして、貧乏な学生が泊まれるようになっているんです。「トイレどうするの」と言ったら、駅が近いからトイレも洗面所もあるんです。駅から近いんです。それを作れとは言わないけれど。

●内藤パネリスト

その鈴木くん達は仲間で何をやっているかという、聞いてびっくりしたんですけれど、大分の竹田というところに、さっき、建築家の方々がやっている社会実験の紹介がありましたけど、ああゆう灯籠みたいな、それが竹田は有名で1万本だかをロウソクを立てて竹田市内に飾っているらしいんですが、日向でもそれをやろうと、2人ぐらいで1000本作ったって言っていました。それで、いずれは竹田を追い越すぞと奇声をあげているんです。それは、建築家の鈴木くんともう一人、黒木くんという同級生が二人で1000本切って「これはシンドかった」言っているそうです。具体的な動きが出てくると街がどんどん熱くなってるので、色々なことをやっています。何かの機会に参考にしてもらったらと思います。

●篠原コーディネーター

あれです。徳山に日向の方を2人ぐらい呼んで話してもらえば良いんだ。日向ではこうやったって。

●村越パネリスト

実はですね、まちづくり塾の仲間で、3月の第二土曜日と日曜日に日向に行ってきて、建築士会の人たち

とも連絡はとっていないんですけど、連絡をとってぜひお話を聞いてきたいと思っているので、紹介して頂けると助かります。

●篠原コーディネーター

良いですね。筒井さん、すみません、お待たせしました。また5分ほど、もう少し具体的に。

●筒井パネリスト

まちの居場所がある、徳山どうするのかということですが、徳山の具体的な話の前に、行政向けの話なのかもしれませんが。徳山のまちづくり、駅周辺整備を考える上で、考えるべき視点は何かというのをつらつらと考えてみたいと思います。特にまちの利用者って誰なのか。これまで昭和50年代とか、40年代、50年代ですかね。大体、日本の総世帯数の3分の2が子育て世代でした。核家族化でお父さんとお母さんとその子供みたいのが、中心になってきました。何でこんなことを言っているのかというと、その時代から、まちづくりをやっている人間の метод論が切り替わっていないというのがあるんです。かつて、ファミリー世帯というのは、基本的にはマイホーム主義ですから、いつかは一戸建てを建てて、そこに住みたい。当然ながら、それは郊外の良好な環境を求める。かつ、買い物についてもショッピングセンター、そうゆう所に行く。言ってみれば、郊外の住宅地を造成して、道路作るというのが、それだけではないですが、ある種のまちづくりの метод論だったわけです。これが、今後は子育て世代が急速に減っていくわけです。逆に増えてくるのが、先ほどから話がありました高齢者の世帯です。統計的に言うと、嘘か本当かわかりませんが、2030年には高齢者だけの世代が大体3割ぐらいになる、日本全国です。そう言われています。じゃあ子育て世代はどうなるかというと、せいぜい6分の1ぐらいになる。したがって、街の利用者の中心がドラスティックに変わってくるということです。そうゆう時に、結局、まちの利用者に対して何を、利用者にとって使い勝手が良いものかを考えていくのが行政の役割ですから、何をどう考えていくのか。そのあたりの方法論をしっかりと考えなければならぬ。その中心となるターゲットの方々が何を考えておられて、どんな生活をしておられるのか、をちゃんと考える必要があると思うんです。そうなってしまうと、行政というのはバリアフリーぐらいで止まってしまうケースがあるんですけど、それは前提のユニバーサルデザインとして必要で、高齢者の方々、利用者の立場でのまちづくりが必要であると考えています。その利用者の立場から立ったまちづくりの事例として、高齢者の事例ではないんですけども、益田、島根県の益田です。そこで街なかの再開発をしまして、保健センターみたいなのを作ったんです。その横にせつかく空間があるので、ということで、子育てセンター、子どもたちを遊ばせる空間を作ったんです。ところが、実際には子どもたちを遊ばせるようなお母さんがこなかったというのが実態なんだそうです。何でなんですか、と聞いたら、結局、保健センターの職員が働いているスペースの横に間仕切りもなく子供たちが遊ぶスペースがあるようなんですが、「真面目に働いている人の横で遊ぶ子供はいない」ということでした。どちらかというと悪い事例なんです。ともあれ、誰が使うのか。その使う人から考えた場合何なのかを考えて、施設にしても、駅前広場にしても、設計・整備・計画をする必要があると思います。それじゃあ、ご高齢の方々。ちょうど、私

の父親が70代後半なので見ていると、昔は完全な仕事人間で、頑固親父そのものでしたけれど、最近、文化的な活動とか地域に目を向けています。色々と話を聞いていると、なんだかんだで自由だし、時間もあるし、色々やりたい、あと、もう一つ生きがいみたいなものが欲しい、と。私の父親の意見ですから、すべてかどうかは分かりませんが、その辺りの「生きがい」も一つ重要な要素なのかなと思います。一つ、その、最近ちょっとやっているか分かりませんが、名古屋で、昔「トワイライトスクール」という試みを名古屋市の方でやっていたことがあります。これは、学童保育ではないんですけれど、学校で、小学校で子供達を預かりますという活動です。預かる時に保育士とかそういう方々ではなくて、地域の方々が子どもたちの相手をするという取り組みでした。途中で名古屋を後にしましたので、その後どうなったのか分かりませんが、やはり、そういう、トワイライトスクールということで、学校という舞台で子供を預かるという活動をした時に、相手をする方というのが、割とご高齢の地域の方々でした。ベーゴマを教えたりとそんなことをやっていたと聞いていますけれども。たぶん、それも一つの生き甲斐なんだと思います。だから、高齢者の方々にターゲットを絞ったっていう、だから、高齢者だけが生活しやすいということではなくて、高齢者の視点から見た街というのは、当然、若い方々、その子供の方々も暮らしやすい、そういった子どもたちが見れる、そういう街が理想なんだと思うし、まあ、そこで上手く、一つ教育の舞台としてはそうだろうし、あるいは、託児所みたいな発想もあるかもしれませんが、あるいは逆の発想で、宅老所、宅老所のたく、お宅の宅という字を書いた宅老所という取り組みを愛知県の西尾市かな、していますけれども。そうした、地域とその高齢の方、高齢の方が中心となった地域の交流、こういったものができる、自然的に発生的にできるような装置というものがあつたら良いのかなと思います。ちょっと散漫になってしまいましたが、誰がターゲットで、そのためにどんな方法論で、まちづくりを考えるのか。その方々が望んでいるのは何なのかということ、もう一度、漠然と考えるよりは、もう少し絞って考えると良いのかなと思っています。

●篠原コーディネーター

はい、ありがとうございました。一応、一通り、パネリストの意見を伺いました。あとは、時間がございますので、先ほどお約束したように、フロアの方の質問なり、ご意見なりを何人か伺えると思います。10分か15分ぐらいですね。ただ、なるべく色々な人に発言して頂きたいので、なるべく手短に。一人で5つも6つも質問されたら困るので、質問とか意見は一人1つか2つぐらいにして頂きたいと思います。挙手をしていただければ、行くと思いますので。

●会場質問者

今ですね、お聞きしてましたら、どちらかといえば、徳山駅周辺の需要を市民重点というのか、そのへんから考えているようですが、やはり、駅を全国的にPRするという意味もあってですね。市民みな一緒だと思うんですけども、駅に送り迎えしたり、色々なものを迎えたり、そういうことをしょっちゅうする訳ですね。徳山駅ですから。だから、そういう人たちを労うというのか、来てもらった時に皆で話しあえたり、ゆったりできたり。送る時に、ゆったりできたり、話ができたりする。そうして、徳山市をもっとPRしていくような、そういう場所がすごく大事じゃないかと思んです。ですから、さっき言われたように、周南市な

のか、徳山市なのか、区別していくとなかなかわかりにくということだったんですけど、そういうのも、今の駅の状態がですね、我々が一般的に送り迎えしても全然そういう場所がないんですね。落ち着く場所が。ですから、来た人、送る人に対して、ちょっとゆっくり話したり、時間早く行って、そのことによって、お互いの交流を深め、さらに、色々な人に徳山駅を知ってもらおうというような、そういう風な場所とか催しとかも考えて頂きたいと思います。

●篠原コーディネーター

わかりました。市民というだけでなく、周南市の一つの顔なんだから、そとから来る人ももう少し意識して考えて下さいよという意見だと思うんですが、内藤さんどうですか。日向と高知ですけど、今年の秋に旭川が完成しますけれど。どうですかね、日向なんかを例にとって言うと。

●内藤パネリスト

やはり駅というのは究極の公共建築物なんです。これほど人が多く利用するところは無いですよね。この場所が先ほど言われたように、人を出迎える場所、来る人にとっては街と出会う場所、この街を後にして都会に出て行く人にとっては別れの場所でもある訳です。ですから、駅のことをロマンチックな言い方でいうと「未知との遭遇」と「帰っていく場所」と僕は言うことがあります。見知らぬものと出会う場所でもあるし、同時に、帰っていく場所でもある。ですから、今回、駅の周辺に出来上がるものが、そういう場所、別れの場所でもあるし、出会いの場所でもあるというような、そういう場所になれば良いなと思っています。

●篠原コーディネーター

模型を見て頂いたらわかるというか。あの通りできるかは未だ分かりませんが、ああゆう大きな屋根で一つの劇場みたいになっている駅は日本は無いですから、特色は十分出ると、そう思っています。では、他の方。

●会場質問者

私は市議員なんですけど、発言の場所があるんですけど、今日はですね、先生方の意見をお聞きしたいことが一つだけあるんで、質問させていただきます。あの、なぜ、橋上駅でなければならぬのかということがどうしてもわからないんですよ。新しくできる、駅の機能がなくなって、線路の上に移っちゃうんですね。私の頭でいうと、息子を迎えに行ったり、家族を送り出したりするのに、改札口に一番線に送り出す、今の駅がすごく好きなんです。なんかあの、橋上駅舎になっちゃうと、そういう機能が別れてしまって、建物がね。それを先生方がどうお考えになっているのか、その点についてご意見をお聞かせ頂きたいなと思います。

●内藤パネリスト

気分としてはですね。橋上駅は本来、全体が一体になったものの方が駅のイメージは作りやすいです。日向にしても、高知にしても。ただ、日向は連続立体交差事業とペアですから、いきなり出きたわけではないの

で、今回は鉄道側の事業が高架事業がない中で、いわゆる合築というやつですけれども、駅ビルの改築のプロジェクトが一つの前提になっていますので。ただ、思いますのは、必ずしも、だからといって悪い訳でなくて、橋上駅の場合、今の駅ビルのように自由な使い方がし難くなると思うんですね、おそらく。それはJRの占有敷地の上でやりますから。むしろ、市民利用という、今のプロジェクトの方が自由に使えて、市民のものになっていく可能性はあると思うんです。

●篠原コーディネーター

ビルの中はそうだね。

●内藤パネリスト

はい。そうゆう風に思います。つくり方としては、どっちが良いかという一長一短だと思っています。

●事務局

橋上駅舎の必要性ということのご質問でございます。これはまた議員さんとはじっくりやっていきたいと思っていますけれども。この駅周辺整備事業は大きく3つの事業を抱えております。南北自由通路、それから、北口駅前広場、さらに駅ビル。3つの大きな事業を進める上で市は南北自由通路を線路上空に整備し、駅ビルを建替える。で、その駅ビルでございますが、作られて44年に作られて、40年間経過しておりますし、耐震構造という点でもエスカレーターやエレベーターなどの老朽化なども考えます。そうゆうことから、やはり、賑わいの中心の施設として建替えたい。そうした場合に、南北自由通路と駅舎を合体して利用した方がはるかに利便性が上がりますねと。そうゆう条件のもとで、JRさんの思いとしては、新幹線、在来線の乗り降りなどシンプルな形で動線として一体的に利用したいと、さらに、駅舎等も集約して活用したい。そうゆう風な意見がやはり、当然でてる訳でございます。この辺りのことにつきましては、私は南北自由通路と橋上駅舎というものは一体とっておきまして、市の思いとしましても、現在、駅ビルにある駅機能を移転して頂いて、そのスペースをピロティ構造のオープンスペースとして、さらに、交番とか、さらに、日本一のトイレを作るとか、そうゆうふうな有効活用したい、そうゆう思いもありますので、やはり橋上に移して行くという方針を持っている訳でございます。

●篠原コーディネーター

南北自由通路が8メートル幅がありますけれども、10メートルぐらいの南北通路を見るとですね、あの窓が小さくて、壁があって、見えないんですけれども。最近、僕の教え子が北海道の岩見沢でやったんですけども、通路がずっと全部ガラス貼り、その上を歩いていると、下の列車が良く見えて、鉄ちゃんにはたまらないところになりますよ。僕も多少すきだから。だから、橋上駅舎が一概に、今のやつに比べてつまらないかという、そうではない楽しみが出てきますから。そうゆうことでよろしいでしょうか。ほかに。ええと、どうしようかな。では、あちらの方とそれから、すいません。ちょっと、あんまり空間的に偏ってはいけないので、今、手を上げられていた方、次に。

●会場質問者

先ほどから聞いておましてですね、「後世に残す」ということですが、30年を見ているのか、50年先を見ているのか。ここに居る人々はたぶん30年もたったら、何人かいらっしやらないと思うんです。それを考えると、年寄りが多くなるから、年寄り中心の街にしたいのか。それから、今、ここに人々が集まらない、若い人の世代、20代、30代、40代の方々の考え方がどうも反映させられていないと。私、今日始めてこの会に出させて頂いたので、私の知識不足かも知れませんが、そういうことが伝わらない会議だと思いましたので、申し上げました。

●篠原コーディネーター

はい。寿命というか、タイムスパンについては、やっぱり内藤さんだね。どんな風に考えていますかというので良いんだけど。

●内藤パネリスト

さっき篠原さんが言ったことに尽きるんじゃないかと思うんです。市民の方が減って、もちろん、今、ここにいらっしやる方も市民の方ですが。次の世代のことを考えると、公共の場所の設計のマナーだと思います。幾つかの考え方があります。一つは、機能をあまり固定的に考えすぎないこと。つまり、皆さんの活動ってというのは、10年、20年経つと変化していく訳ですから、そういうものをできるだけ受け止められるようであるべきだと思っています。もう一つはやはりメンテナンスです。自治体はこれからどんどん財政が厳しくなっていくと考えられますので、できるだけメンテナンスがかからない、費用がかからない、当然、エネルギー費用もかからない様なものを作るべきだろうと思います。で、建築にできることはそのぐらいのことかもしれません。ただ、一般的な話をさせて頂きますと、商業というのは、非常に短い時間で入れ替わっていくわけですね。それは商業施設の特徴だと思うんですが、それに対して、公共がやる側の施設はあんまり変わらないで、手間暇かけないで、そのまま使えるというのが公共建築の真骨頂だと思っています。駅もそうだろうと思います。皆さんの記憶を重ねていく、ずっと長い間存在していく。可能であれば、あまり安請け合いはできませんが、100年ぐらいはびくともしない。可能であれば200年。というような時間を刻めるものを作るべきだと思います。ちなみに、先ほど事例に出ました益田というところで、私は大きな建物を設計しました。残念ながら、先ほどご紹介頂いたのは私が担当した建物の中ではないので、良かったなと思ったんですが。これは石州瓦を使った建物ですが、ここは割と近いので行って頂きたいですが、一応、県の方に申しあげましたのは、300年と僕は言いました。「300年このファサードはメンテナンスフリーです。」そういう話をしました。ものが全然違いますので、同じことはいえませんが、やはり、駅周辺の建物も100年とかということが言えたらと思っています。

●篠原コーディネーター

あのちょっと補足しますと、建築家の方は色々な人がいて、立派な賞をもらった建築も10年も経たない

うちに、雨漏りもしてボロボロになったり、できたときは良かったけれど、みずぼらしいよね、というものが結構あるんですけど。僕がみる限り、内藤さんの建物は全然そうゆうのはないです。みずぼらしくはならない。まあ、今度のビルは内藤さんがやる限り、そんなことはないと思います。はい。それから、今度、その後ろの方。もう一度、手を挙げて下さい。

●会場質問者

昔、人力車を見て、そして駅の池で遊んだ、そうゆう郷愁をもった世代のものです。今度新しい駅を非常に楽しみにしています。時代が変わるんですから、それはそれで良いんですね。ところが、先ほど聞きましたら、駐輪場を確保されて、駅の線路の近くにできると。そうしますと、みなみ銀座通りの道路はどうなるんでしょうか。これが一つ。それから、篠原先生が盛んに言うておられます。駅に行くまでの色々のものがどうなるのか。どうしても不思議なのは、なぜタクシーが昔から最優先されて、一番前に陣取るのかと。この問題を解決しないと、僕は死にきれないですね、本当。本当に死ねませんよ。おそらく金を相当貢いでいるのかな、市の方に。僕は北欧に良く行くんですが、フィンランド、ヘルシンキ、ストックホルムの駅にしても、駅に通じる色々な良いムードが出来ていますよね。ストックホルムの庁舎なんて、あれを見ながら駅のホームに入りますと、駅の天蓋がなだらかで、見送ると涙が出ますよね。こうゆう駅前のエントラスというか、ムードを作るためには、タクシーは御幸通りはかなり向こうでも良いんです。そして、そこを降りたお客さんが、この街は立派なまちづくりしているな、浴道はすごいな、彫刻もおいてあるな、無料なベンチが、人の名前が入ったベンチが沢山並んでいるな、とそうゆうムードも必要だと思うんです。ところが、ここ30年みましたら、駅からベンチが無くなる、何が無くなる。人間不在ですよ。しかし、どの市長さんも言われました。未来に向かって、老人に優しいまち、子どもたちに未来のある明るい街って。冗談じゃないですよ、これは。今日ここに来て、本当に言いたかった。初めての参加ですけれども。これから、公私ともに、先ほど篠原先生もおっしゃられましたけれど、やっぱり官公庁マンと民間が一緒になって、そして、官公庁マンに足りない能力は民間からどんどん入れて。そのための税金なら使っていると思うんですよ。それぐらいのことをやらないと活性化はなりません。僕も駅前のところに住んでいるんですが、固定資産税は抜群に高いです。そうゆう人たちの気持ちはないがしろにされて、何か知らない新しいものにどんどん、どんどん、活性化として。これも一つ問題だと思うんです。市の皆さん良く考えて欲しいんです。駅前の一等地に住んで、固定資産税をどうにかして欲しい。これらを見殺しして、あれもつくろう、これも作ろう。そして、自分たちが作ったら、官公庁は関係ないとして、文化会館だっけそうでしょう。つくったらそのまま。一講演が1,500人ぐらいの入場者だったらですね、官公庁には1,500人いますよ。一人で1枚買ったって、1,500枚です。そうゆう責任を持って欲しいです。

●篠原コーディネーター

わかりました。ええと、駐輪場の話とタクシーの話は市の方で答えられますか。固定資産税の話は、まあしょうがない。

●事務局

まず、駐輪場については、駅の東側に作りたいと思っております。今、駅ビルの東側に整備していききたいなと思っております。具体的な計画をこれから立てていきます。そこが駐輪場です。それと、みなみ銀座の通りですが、駅広側に直接出る形にはしないで、そこを巡回できるように、線路側に迂回路というか、交通が処理できるようにしていきたいという計画で考えています。あとタクシーについても、やはり、これから、公共交通機関が一つあると思っております、その整備については、今、駅のロータリーの内側にいます。現在、32台ぐらいあるスペースを18台に減らして、位置づけたいなと思っております。その形で考えております。

●篠原コーディネーター

はい。それでは、もう時間なので、手を上げた、もう一人。それで終わりにしたいと思います。すみません、ずっとやっている訳にはいかないのです。

●会場質問者

歩行者中心の安全でゆとりのある広場というのは嬉しく思います。ただ、もう一度確認したいのですが、橋上駅舎ということになりますと、一階の現在の改札はなくなるのでしょうか。また、我々市民は施主の立場ですので、いくらお金を出して何を作るのが気になるのですが、どれだけのお金を使うのか、それを分かる範囲で教えて頂きたいと思えます。それと、1階の改札口が仮に無くなるのであれば、これを駅とは言えないのではないか、橋上駅舎で2階に行く訳ですから。駅ビルの建替についても要るのかな、という気がしております。

●篠原コーディネーター

あの、改札口の件についてはお答え頂きたいと思えますが、後半の方、予算の使い方の話は議会の話みたいな話だね。こういうところでやるんですか。改札口の話、よろしくをお願いします。

●事務局

1階部分、今、一番ホームに、おっしゃいますように改札口がございます。先ほどの議員さんの橋上駅のお話しもありますけれども、やはり、市の思いといたしましては、駅ビルにはございます駅機能を移転すると、移転したスペースをピロティ構造のオープンスペースにして、交番とかトイレとかを整備し、有効な賑わいの創出につなげていきたいと思っております。JRさんに当然、協議をしていかなければならないということでございます。当然、今から協議に応じて頂くわけですが、たぶん、その費用は、全額、市の負担ということになるのではないかと考えておまして、今のところ、設置は難しいかなと考えております。しかしながら、仮に1番ホームに改札口を設けない、ということにいたしますと、逆に利用者の不便解消のためには、逆にJRさんの方に、この事業に合わせて、在来線にエスカレーター、エレベーターの設置をして頂かなければならない、そういうことを強く要望していきたいと思えますし、かつ、色々なJRさんとの交

渉の戦略の中で、最終的にどのような形にするのかを決めていきたいと考えております

●篠原コーディネーター

予算の話は答えられますか。違う場所でやりますか。

●事務局

予算につきましても、先のパブリックコメントにおいて、総額として120~130億ということをお知らせしております。これにつきまして、今後のJRとの工事に関する作業ヤードの関係から、一つ一つ積み上げていく作業を基本設計という作業の中で進めていますので、そうゆう中で、少しずつ確実に説明したいと思っております。

●篠原コーディネーター

もう、いくらなんでも終わりにしましょう。すみません。ええとですね。僕も旭川でJR北海道と、日向市ではJR九州と、徳山はまあこれから西日本ですね。JR西は一時期、三重県の駅で、あれは東海か。倉敷でも付き合ったことがあります。その経験で言いますと、手強いですよ、ものすごく。つまり、改札口の話も「改札口を二つ以上にしたら人件費がかかりますのよね、どうするのですか、我々は民間の会社ですからね」となるわけです。だから、あれもこれもと市民の側でそれが便利だよねと言っても、そうは簡単には話しにのってこないというのが実感です。ただ、信頼関係ができて、一生懸命やりだすと、インセンティブが非常に高いですから、良いものをつくってくれることも確かです。むしろ、鉄道側と都市側との信頼関係をどう作るのかが大きな問題だと思います。で、30分までという話だったので、すみません、申し訳ないです。パネリストも色々な意見を出して頂いて、フロアからも活発な意見を出して頂きまして、まあまあ2回目としては良かったと思います。それで、ここに来て初めて、市の人と地元の建築の人と話していてわかってきたんですけど、今申しましたように、駅と駅前広場という話は鉄道会社と市とタクシー事業者とバス事業者と市民の自家用車をどうするのかという話と、関係する人がものすごく多いので、まとめるのはすごく大変なんですよ。今までそうゆう経験をしてきたからわかっておりまして、市の担当に文句ばかり言っていると、だんだん市の人も嫌になって、なんのためにやっているんだとなってくるので、僕の意見としては、色々課題はあるでしょうけれど、「一生懸命頑張ってるよね」とむしろ後押ししないと最終的には良いものはいかないと思っています。そうゆう感じが非常に強くします。はい、どうぞ、一つだけ。

●藤井パネリスト

あの、バス、タクシーをどうするかという問題は運用の問題ですから、我々も力が足りませんが、商工会議所の中でも交通運輸部会というものがありますから、そこで協議をしていくことも多いに今後あると思います。今この場で決めることでも必ずしもないと思います。私ですね、この間タクシーに乗って、親しいものですから、「東京はアイドリング禁止だ」と言ったら、「いや、社長、我々はそんなことをしたら怒られる」というので、「いや、そんなことはない」と家のトラックで長距離を行ったら、蓄熱シートというのを付けてですね、アイドリングをやめるという話をしています。だから、そうゆうことで、本当に冷静に、今から、

油が高くなれば、ますます省エネが必要になるでしょうし、否応無く、バスもタクシーもアイドリングも止めるということにならざるを得ないと思います。あるいは、タクシー会社にはお金がたくさんある、アイドリングをやるなどと言っても、ちょっと待つてとなる。しかし、「周南の一番良いところで空気を汚してくれるというのは反社会的だ」という人が多いと思いますから。今後の運用は商工会議所としても及ばずながら調整をしていきたい。タクシー会社もバス会社も一般に理性的に話しは付くと私は考えていますので。もう一つ、橋上駅舎の問題で、私も「冗談じゃない」という思いもありますし、ずいぶん友達にも言われました。だけど考えてみると、橋上駅舎しか今の JR は考えていない。非常に怒られるかもわからないですけど、JR は今、新幹線を中心に経営していると僕は思うんですね。新幹線に乗っている人が、徳山で乗降客で 4000 人、一般の在来線に乗っている人が 1 万人弱。1 万人の方が多いですけれど、たぶん、JR は売り上げを考えると新幹線を中心にしようという思いはある。これはもう避けられない。そこは我々も冷静に受け取らなきゃしょうがないかな、と。それより、今の在来駅と新幹線の駅が、私が一番最初に申しましたが、山側に出来ていたら、もっと不便だったかなと思うんです。私、この間、品川駅を良く見てきました。あれは、品川線に新幹線に乗るのに自由通路はすごいですけど。京浜東北、東海道に乗る人は、たぶん、とても遠いだろうなと思いました。だけど、現実はそのようことです。品川駅を作るのに市民に相談ということは一切なかったと思います。徳山はまだ相談ってのがあるから。私さっきいい加減に言いましたが、最後の最後は、JR にエスカレーターを作ってもらってから、「あとは穴を開ければ良いじゃないか。この間、銀座の宝石店に一晚で穴を開けたじゃないか。一晚で開けたじゃないか」と冗談を言います。だから、JR と交渉すること、市がやること、あるいは建築家の先生方をお願いすること、実際の運用というのは、また市民が知恵を出して考えるということをしないと、この計画はまた前にいかなくて、結局は止めたということになりましたら困るんですよ。皆さん、まあ色々問題あるけれど、まあ、このぐらいでよかろうと思う方が 3 分の 2 おられたら、市役所の職員は一生懸命やると思うんです。私、心配しているのは、市役所の職員の前で悪口を言いたくないけれども、市役所の職員というのは本当にスローにしか仕事をしないんですね。いや、悪口を言っているんじゃないくて、何で仕事をしないかという、あんまり能率的に動きすぎると「いや、それは反対」という人が出てくるんです。周囲に目を配りながら、ゆっくり、ゆっくりしか歩けないんですね。いやそれは困るから。どうでしょうか。このぐらいでよかろうという人は手を挙げて頂けたらと思うんです。NHK みたいに○、△、×を示せば一番ですけども。そうじゃなかったら、まあまあ。あんまり私は言いすぎかも知れないです。「お前はデザイン会議に出て何をやっているんじゃない」と言って、皆さんに迷惑がかかると悪いから。ちょっと言い訳をしました。ありがとうございました。

●篠原コーディネーター

どうもありがとうございました。まあ、プランが大体出来つつあって、どんなものができるか良くわからないし、百何十億もかかるのか、という思いもあると思いますよ。だけど、最終的には良いものを一所懸命つくって、後の人に渡さなければならぬので。信用して下さい、というのも何ですけど、日向とか高知は出来ていますから見て頂いて、使っている人の意見も聞いて頂いて、ということですかね。すみません、15 分も延長してしまいました。長時間にわたり、ありがとうございました。パネリストの皆様、ありがとう

ございました。

●司会

パネリストの皆様、コーディネーターの篠原先生、本当にありがとうございました。もう一度、大きな拍手をお願いいたします。予定時間をオーバーしてしまいましたけれども、これで、シンポジウムを終わらせていただきます。本日の進行につきまして、長時間ご協力いただきまして、誠にありがとうございました。それでは、これをもちまして「第2回徳山駅周辺まちづくりシンポジウム」を終了させていただきます。

本日のシンポジウムに対するご意見、ご感想をお手元のアンケート用紙にご記入の上、ロビーで回収しておりますので、ご協力いただきますよう、よろしくお願いを申し上げます。

また、総合庁舎の駐車場をご利用の方は、4時間まではそのままゲートを通過できますが、4時間を越える場合は駐車券にパンチをする必要があります。パンチをする場所、いま一度ご紹介します。一階県税事務所または1階施設管理室でパンチが押せますので、そちらの方でお願いします。

皆様、本日はまことにありがとうございました。お気をつけてお帰り下さいませ。